

---

# 女に生きた女

ハリ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女に生きた女

### 【NZコード】

N4487E

### 【作者名】

ハリ。

### 【あらすじ】

没落した公家の娘の永久子は結婚するために東京から長崎へと嫁いでいく。自分が女として生きた人生は何だったのか これから歩む人生には何が起こるのか 意志を強く持ち、頑なに自分の力を頼りに苦境の中で自分らしく生きようと葛藤する永久子の人生を追う

## 第一章 「列車」（前書き）

初めて書かせていただきます。

ある歴史上の人物を参考に思つままに書いてみました。

かなり適当に思いつきで書いてるのでミスや時代錯誤があつて意味不明になつたりするかもしれませんが暖かい目で見てやってください（^ ^ ;）  
ではどうぞ～

## 第一章 「列車」

### 第一章 「車窓」

汽車に揺られる

もうかれこれ何時間そうしているだらうか。

窓際の席で重い溜息を漏らすのは誰もが田を見張るほど美しい女性であった。

「永久子さん、何もそんな心配なせりんでももうすぐ着きますけえ。

」

梅<sup>うめ</sup>という初老に近い女がその女性を励ますように優しく話しかける。

「やはり早急に考えすぎたかしら・・・それとも何も考えてなかつたのかもしれないわ」

口には出さなかつたが永久子はそんな事を頭の中で言つた。

そう、こうしたひねくれた考え方こそが自分をいくらか不幸にしている明確な理由であることを永久子は知つてはいる。だが、考えずにはいられない。そういう性格に生まれ育つてしまつたのだ。

永久子は万人が美しいと称える美女である。

昔懐かしい奥ゆかしい美を備えつつ、最近にわかに世間が活氣付いて「ハイカラ」と呼ばれる言葉が流行りそれらに踊らされる乙女達にも負けない程美しい。真珠の様に白く光る美しい素肌も如来の様に

整った顔によく似合い、髪は女の命とばかりによく手入れされ結われた光る黒髪も夏のはじめだと言つのに暑さを感じさせないきりりと締めた帯も高貴な風格を匂わせている。永久子が通れば皆が振り返る。そう比喩しても過言ではないくらいの美貌の持ち主と品格を含ませ持つ。

実際永久子はかなり身分の高い女であった。

この世の中公家の没落は珍しくないが、永久子はその公家の中でも有数の佐原家の一人娘であった。

佐原家と言えば公家の中でも最高峰と言われ、天皇に触れるほど近く誇り高き血が流れる一族として知られている。

しかしその中に位置する永久子の存在は少しばかり陰つたものである。

何故なら永久子は正妻の子ではないからである。

永久子の父は正妻を愛さなかつた。

決められた政略婚に不満を持ち正妻を相手にせず長く付き合つた妻との間に子を成した。それが永久子である。

一族により妾から幼くして引き離された永久子は父の許で育てられた。

正妻の部屋の近くを通る時いつも冷たい視線を感じた理由を知つた時は大層いたたまれない気持になつたものである。

その永久子が霧よりも深く重い溜息をついた理由は一つだ。  
今日永久子は結婚するのである。

何とも急な話に聞こえるが色々な事情が折り重なりこの日となつた。せつかくの花嫁となる機会に何故永久子がこんな冷静でいられるか  
というと永久子は既に結婚を二回していることが大きな理由の一つといえるだろう。

いくら人生の中の大きな行事の一つといえど、3回も行えればまるで法事のように手馴れてくるものだ。そして永久子の性格上それは本

当に強く出でいた。

永久子の年は二十八歳である。

可憐な女学生としての華やかさは既に消えてしまつてゐるが、まだ消えぬ若さと憂いをおびたたおやかさの間にいる彼女はそれ以上に不思議な魅力を放つてゐる。

「私・・・少し疲れましたわ」

梅が心配そうに見る。

「大丈夫ですか？ほんにもうすぐ着きますけえ、我慢してくださいあ」

もうすぐ着くから疲れるのだ

そう永久子は言い返したいが梅の心配そうな顔をみてこれ以上動搖させるのは悪い気がし愚痴をいいそうになる口をつぐむ。

梅は大層気が利く女である。

永久子の傍女中として仕事を任された日からこの列車に乗るまで散々に世話を焼いてくれた。

朝は、静かに起こしてくれるし何も話さずとも欲しいものを運んできてくれる。

疑り深く思案深い永久子でもこれだけ良く接してもらうと悪い気はしない。

（梅は恐らく本当に良心のある女なのだろう。）

完璧とまではいえないが、数日共に過ごした永久子はかなり強い確信があった。

緑が生い茂る山々が段々と近づいてくる。

朝方駅を出たときは人混みと窓から見える工場の煙で顔をしかめた

のに、今見ている景色は何とも清清しい。

縁は心を洗う色だと永久子は思う。

結婚などという半ば強制じみた行事に参加するのは億劫であるが、この縁の美しさだけは本当に見にきてよかつたと心から思う。

汽車がもうじき駅に着く。

永久子はここしばらくのこの数奇な過去を振り替える。

「私はどうしてこの地へ来ることになったのだろう？」

去年の暮れの時点で永久子は過去に2回の結婚・離婚を経験していた。

1度目は父による政略婚だった。

十七だった永久子は父の勝手に決めた相手が嫌で嫌で仕方がなく毎日泣きはらしていた。

実の母親と離されはしたものの我が娘よと可愛がってくれたのに何故愛してもいい男と添い遂げよと命じるのかと永久子は涙ながらに訴えたものだ。

自分も同じ様に不幸な結婚をしたではないか。  
散々義母を悲しませたではないか。

そう抗議する永久子に父は叱咤を浴びせた。とうとう結婚させられた永久子は大人とは何と理不尽な生き物なのだと恨みながら嫁いでいった。

そしてやはりそんな無理強いされた結婚は長続きせず夫婦生活は一年と言う短い時間に幕を閉じた。

一度目の結婚は永久子が夢見た結婚そのものだった。

自分を愛してくれる男との幸せな結婚に少女の様に舞い上がり式を挙げた記憶はまだ新しい。

しかし永久子の夢はやはり夢と終わる。

自分を桜咲き乱れる華の女学校時代に戻してくれたはずの夫はとんでもない好色で永久子と契りを結ぶ前から何人もの女を囮つていたのだ。

自分その他に一人一人ならず数えきれない女を抱いていたという嫌悪感とそれに気付かずただ阿呆の様に薄っぺらい幸せに騙されながら暮らしていた恥ずかしさは永久子の行き過ぎた自尊心を傷付けるのに十分だった。

出戻った永久子を見て父は激しく怒り、屈辱的な侮蔑を述べた。

「ほれ見たことか。女が見る夢の最後などせいぜいこんなものだ。これなら最初の結婚で止めおいた方がいくらましだったかもわからん。何の為にお前を連れてきてやつたと思つてゐんだこの阿呆め。」

愛を与え育ててくれたはずの父の心ない一言に永久子はひどく傷付いた。

全ては金の為だったのか。私を妻から引き取り育てたのも全ては結婚相手の金欲しさだったと言つわけかいのはわかる。

今まで育ててくれた父が一度も自分に愛情を注がなかつたわけでないのはわかる。だが、自分を育てた理由に金が絡む思惑があつたといつ事実でただただ永久子は悲しくなつた。

思えば結局今回の結婚も金が目当てなのだ。

全盛期佐原の血筋であるというだけで名を馳せた学のない一族達が

没落させたこの家に残る資産はわずかである。

このまま行けば永久子自身もいざれどうなるか先行不安の身だ。

そこで父はまたも愛のない結婚を強いてきた。

相手は九州・長崎の造船業社長の嫡男だといつ。

年は永久子と同じ二十八で既に父の会社を手伝い順調に成金としての道を歩んでいる大金持ちだ。

東京にいた頃に少しの間だけ顔を合わせた事があつたが、何だか神経質そうな男だったのを微かに覚えている。

こんな男といふと気が滅入りそうだな・・・と他人事に考えてたあの時父が既にその男との縁談を進めていたなどと誰が予想できただらう。

向こうは公家と結び付き名が欲しい。こちらは向こうの資金が目当てだ。

とても理にかなつた結婚だと一族は喜んでいた。

永久子にしてみれば冗談じやないとはねのけたくなる様な縁談だがやはり強くは出れない。

自分に落ち度がなくただの一度も人生をつまづいてないあの頃とは違う。永久子は自分の無知により離婚を経験しているのだ。もはや永久子に逆らう権利はない。

自分が権利を得た結婚も見事に失敗してしまった。

これ以上どんな方法で結婚したとしてももう満足のいくものはないだろう。

ならば仕方がないではないか。自分は一度機会を与えられたのだ。それに失敗したのだ。

幼い頃から自分は優れていたと思っていた

他人とは違う特別な何かがあると思っていた

実際周りの人間の数段上の能力を持つていることは自負できる  
しかし蓋を開けてみればこのザマだ。ただの未熟な一人の女に過ぎ  
ない

永久子は含み笑いをした。

それを見た梅はようやく永久子が表情を変えたので嬉しそうだ。

「・・・ほんに、いい所ですけえねえ。」

「ふふ、そうだといいけれど。」

駅が近づいて列車の速度が落ちていく。

緑の色も濃くなっていく。

あの駅に着いたところでいい事が待っているはずがない。  
自分の勘がそう言つているのだ。

永久子はまた同じような含み笑いをした。

それは己の呪われた運命を少しでも軽くしようと自分を嘲る為の笑  
いであった。

## 第一章 「列車」（後書き）

中々ひねくれた主人公ですいません  
これからどんどん内面描写を深くしていけたらいいな~と思つてま  
すのでどうぞよろしくです

## 第一章 「下車」（前書き）

東京から長崎に嫁ぐ事になった永久子。  
目的の駅に降り立ったそこには喜一といつ男が迎えに出ていた。

## 第一章 「下車」

汽車が駅に着いた。

汽笛の音が鳴り響き目的地に着いたことを知らせる。

「わあわあよひやへ着きましたよ奥様。」

「梅……」

「あ……」

梅が小さく声を漏らす。

2人でいる時は「永久子さん」と呼ぶように言いつけてあるからだ。永久子は奥様と呼ばれるのが好きじゃない。奥様と呼ばれて幸せだった時期は一度もなかつたからだ。「奥様」とおとなしそうに呼ぶ女中が実は夫の妾だったという皮肉を何度味わつた事だらう。

「すいません永久子さん。以後気をつけますけえ勘弁してください。」

梅は申し訳なさそうに頭を下げた。

「良いのよ梅。さあ、荷物を運んで頂戴。もう降りなくては。」

「はい、永久子さん。」

久しぶりに外に出た永久子は着物の帯がきつて締められた範囲で大きく呼吸する。

ああ、都会の空氣とは全てが違う。懐かしい里のかほりだ……

永久子は自然が好きだ。小さい頃よく旅行に行つた先の山や川でブナや杉林の中を駆け回り川魚を追い掛けて日の光を浴びながらすくと育つた懐かしい思い出が蘇る。

大きく吸つた息を静かに吐いた時誰かが永久子に話しかけた。

「東京からはるばるとよつじやおいでくださいました。奥様。」

そこには四十くらいの瘦せ氣味の男がお付きを従えて立つていた。白い半袖のシャツを来て紺のスラックスに上等の革靴だ。

恐らく夫（となるであろう男が）それなりに信用をおいてよじした人物のようだ。

ただ、パリッとノリをきかせたシャツをあまり着こなせてないところを見るといつも着ているわけではなくこの日のために着せられたものらしい。

「せんせお疲れのことと存じますがこれから少し歩きますけれど、着いたらゆつくり休めますからお願ひします。」

東京よりの丁寧な言葉を話すと頑張つてはいるが、中々この地方の奇妙な訛りが抜けないらしい。更に変わった方言で男は話しつづける。

「良いといひでそつ。何度か東京に行きやしたが空気が苦しくて大変でした。やはりこりういう場所にいると厳しい所です東京は。ああ、申し訳なあ。私の名前は喜一きいちです。どうぞ呼び捨ててください。」

喜一と呼べといつその男は額や鼻の頭にじわじわと汗の水滴を作つている。

夏のはじめで暑がつてゐにしては少し多い量だ。

初めて永久子と話すので緊張しているのだろう。喜一だけではない。その後ろからついてくる付き人達もどことなく緊張している。恐らく彼等がこの様な態度を取る理由は一つだろう。

永久子は皇族の血に近い公家の身分を持つ。近いといつてもその近さは他の公家とは比べ物にならない。

母親こそ妾だが、父親は天皇の従兄弟である。

天皇と言えば生き神様と呼ばれ日本中から崇められる存在だ。

実際に見る機会があつても直視はできずお辞儀をして見送らねばならないし、天皇のお顔が載つている新聞記事は決して雑事に使つてはならない。

皇后のお顔が写つた新聞で大根でも包もうものならどんな恐ろしい事が待ち受けているか分からぬ。

そんな天皇の存在を神格化する周りの人間の反応を永久子は心の底から馬鹿にしていた。

天皇が何だと言うのか

私達と同じ容姿をしたただの人間ではないか。

私達と同じ様に老い、私達と同じ様に死ぬのにどこが神なのだろう。いつの間にか表れて崇められているだけで特別どうといった力を持ち合わせていいわけではない。

現に天皇の血が混じつていると言わわれているこの躰に流れている血は赤い。

光るわけでもない、特別美しい色と言つわけでもない、畑を耕し疲労の汗を流す農民と同じ赤だ。赤いのだ。

こんな事を口に出せばたちまちつまはじきにあい父に罰せられるであらう事は容易に想像がつく。そんな苦境に立たされるのを知りながら熱弁を振るうほど永久子は馬鹿ではない。

ただただ押し黙りそしらぬ振りをするのが一番いい方法だ。周りもちやほやと勝手にもてなすだけだから適当にあしらつておけばいい。

慣れた作り笑いで永久子は対応する。

「色々とお気遣い感謝します。」

喜一の顔から汗が吹き出る。ただそれだけで美しい永久子なのに天皇との血の繋がりが喜一の体を一層強張らせる。長崎の田舎に住む喜一にしてみれば大変な出来事なのだろう。

永久子は表情一つ崩さずただ新しい住処へと向かう。カラコロと美しい紅色の鼻緒の下駄だけが音を立てる。

その下駄の持ち主の表情は暗いがその周りの人間の呼吸は明るい。

永久子の下駄が音を立てるたびに鉛のようにその下駄は重くなつていった

## 第一章 「下車」（後書き）

暗いですか？？暗いですかね？？；（知らんがな  
どんどん明るくなつてくと思います。。。多分。。。）

### 第三章 「夫」（前書き）

喜一に連れられ永久子は嫁ぎ先へと向かう。  
そこに待っていたのは富田重造とその息子であり永久子の夫となる  
予定の初五郎だった。

喜一に連れられまだ梅雨の残る土道を歩く。

梅は重たい荷物を持ってふらふらしながらついてくるが喜一が連れてきた付き人にほとんどの荷物を運んでもらつてるのでいくらか楽そうだ。

家も人も典型的な田舎道で開いている店も昔懐かしい商いの空気が漂い永久子は落ち着いた気分になる。

父の別邸がある東京で長い間暮らしていた永久子だが東京に慣れる事はできなかつた。人が齷齪あくせくと日夜問わず働き毎日何か新しいものが建ち土地を埋め尽す度人の心も何かけだるもので埋め尽され余裕がない感じがした。

望まない結婚のために降り立つた地とはいえ忙しない空氣のないこの土地は中々良い。

これが「任務」のためではなくただの旅行だつたらどんなに良い気分だろう。

そんな事を考へてゐる内に喜一が永久子に話しがけた。  
さつき汗を木綿のハンカチで拭つたばかりだというのにまた汗を吹き出している。

「い」です。このお屋敷になります。今案内させますけえどりぞ入らつてください。

そこは途方もなく大きな屋敷だつた。

一個人の邸宅として永久子が想像してしたものよりもかなり大きい。庭も含めたらちょっとした広場くらいの敷地だらう。

だが、昔からある由緒正しい家と言う風格はない。

屋根や塀などの作りはかなりしつかりしているが、どちらかと言え  
ばあまり年月が経つておらず比較的新しい感じだ。

父の話によれば造船業で財をなした富田家は富田重造一代で築いた  
ものだという。

恐らくこの家もその流れで作られたものだらう。まだ十年と経つて  
いないような佇まいだ。

女中が来て永久子を案内する。中の作りもかなり豪華で家具も立派  
だ。

しかし永久子は何かを感じた。

おかしい

不気味だと恐ろしいとかとは違う。同じとなくこの家は冷たいの  
だ。

ふと周りを見渡すと「あれが天皇の…」と指差す女中達の何と表情  
の暗いことだらう。

永久子を案内する女中も沈んだ表情で前に進む。

(・・・)の家は何か問題がありそうね

永久子は心の中で呟いた。

そう永久子が思案していると女中は奥の広い部屋に永久子を通した。

「エエドヽヽやいあす。ゞヽゞぞ。」

通された部屋はただの客間にしては少々派手すぎるのではないかと  
いくらい眩しい物ばかりが置いてある。

とにかく机一つにしても少々金箔の多すぎる感がある。  
これは趣味が悪いなと永久子は思った。

その日が眩むような部屋の中に埋もれるよつとしてある一人の男が中央に座っている。

富田重造とその息子初五郎である。

「 ようこそ我が家へ！」

重造が答えた。

恰幅の良い・・・という言葉だけでは足りないくらいの腹回りだ。  
ぶくぶくと太った腕に持つ扇をハタハタと動かしている。  
いくら季節のせいとはいえ喜一とは比べ物ならないくらいの汗をかいている。

浅い紺色の生地で<sup>あつひ</sup>逃えた着物は今日のために用意した事がありありとわかる。

顔に脂汗をかき、重造はにかつと笑う。その前歯の半分は金歯だつた。

「 遠く東京から来て頂いて感謝しますぞ。えらくお疲れになつたでさう。」

重造もまた慣れない標準語を使おうとしている。

だが、喜一よりもっと下手糞だ。いつそ方言のまま話せばよいのに、と永久子は思った。

「 まあまあ、そこそこだつてーお嫁様ー（およめさま）」

五十後半のうすら禿げた髪にギトギトとした油を塗り、無駄に蓄えた髭を右手で盛んに引っ張りながら重造は扇を持った左手で永久子

の座るべき席を指した。

礼儀を知らずに金銭的にすくすくと成長しただけあって、やはり成金には品が足りないと永久子は不快に感じる。

それは重造の息子・・・永久子の夫となる初五郎にしても同じだった。

きつちりと髪を七三にわけ分厚いめがねをかけたその青年はピリピリとした空氣でこちらを見ている。

かなりやつれでいて食が細いのか何か病が潜んでいるのかわからないうぐらいに頬はこけている。

そして田つき ここの田つきが不快だ。

一体何にそんなに不満を持っているのかわからないがずっとこからに鋭い目つきを向けている。まるで睨んでいる様だ。

「・・・」

初五郎は小さい声で挨拶をした。

薄い容姿に比べて声はしつかりとしていた。

しかし口調もまた不快だ。

「遠いところからようこそ。東京から來たのでは色々と慣れない事も多いでしようし、ここの家柄のところに嫁ぐのは初めてでしうから大変な事も多いと思いますがよろしくお願ひします。」

永久子は完璧にこの男とは合わないと思つた。

重造はまだハタハタと忙しそうに扇を動かしている。

自分がここに來たのは一族を保つ資金のためだ。

そして向こうが私をここへ招いたのは貴族の称号を欲しての事だ。それはお互い十分承知だらう。

重造はその脂きつた醜い顔で不釣合いにも皇族との繫がりを欲しが

つて いる。

しかし、重造はその目的の上でも永久子を自分の娘としてみようと  
しているし、案外人柄は良さそうだ。

その容姿と違ひ人的にはまともだと言える。

だが、初五郎の方はどうだらう。

今の挨拶。これは明らかに永久子の身の上を皮肉つている。  
身分以外に勝てるものがないのは承知だ。そんな事は十分わかつて  
いる。

その事に初五郎は笑う。可笑しいのだ。

天皇との血の繋がりがあるにも関わらず生活は我々より低いとは何  
と面白いと思つて いるのがありありと見える。

この男が私を娶つたのはきつと見下したからに違ひない。

そんな事を思いながら「よろしくお願ひします。」と永久子は頭を  
下げた。  
屈辱だつた。

### 第三章 「夫」（後書き）

んー。コミカルとか入れたほうがいいのかな。  
中々進みません  
。。

## 第四章 「新居」（前書き）

長崎での新しい生活が始まった永久子。慣れない新居に戸惑いながらも親しい女中の梅に支えられ暮らしていくが・・・

永久子の新しい生活が始まった。

今までの東京の父の別邸の暮らしとは違う。長崎の豪邸での生活だ。

田舎田舎と初めは馬鹿にしているところもあつたが思つたよりも快適であつた。

富田の家の女中は数えきれないぐらい雇われており永久子の身の回りを世話を任された女中達だけでも顔と名前を覚えるのに一苦労だつた。

永久子は自分が用事がある時以外にも女中達の話を聞き、誰がどんな名前で呼ばれているかしつかりと記憶していつた。

早くこの家に馴染まなくてはという思いからだつた。

これは自分が自ら望んだ生活ではない。  
だが、もう決まつてしまつた以上変えることはできない。

変える資格などない　これは三度目の結婚だ。恐らくこれが最後の結婚だらつ。

ならば骨を埋める覚悟で望まなければならない。

どれほど耐えがたい環境にならうとも自分には意志がある。  
その意志を捨てなければどんな過酷な状況となつともきっと自分の周りも未来も良くなるはずだ。

改めて強く意志を心に刻んだ永久子は少し丸めた背中をすつと伸ばす。

さて…と思つた瞬間目の前に浅く皺が刻まれた手がお茶を出してきた。  
梅だつた。

「もうそろそろ夕飯ですけれど、お待ちください。」

「ありがとうございます。」

例を言つて永久子は一口お茶を口に含む。

渋味のないまろやかな甘味が口いっぱいに広がる。なんと美味しいお茶なのだろう。

永久子にとつてはこれだけでも女中達の作る夕飯に負けないくらい満足な味だ。

「本当にあなたの入れたお茶の美味しいこと。素晴らしいわ梅。」

「めつそつもなかでしあ。そんな事言つてください嬉しあす。」

梅は耳まで真っ赤だ。突然永久子に讃められたのがかなり恥ずかしいらしく照れながら袖で口元を隠した。袖に隠された口元がちらりと見えると梅の小さな八重歯が少しだけ顔を出す。

若い頃はさわにこやかな笑顔の似合づ可愛らしい少女だったに違いない。

梅は年こそそろそろ五十に届くかという見た目だったが静かに刻まれつつの皺の入ったその顔は適度に丸みをおび幼い頃の面影をまだ十分に残していた。

「あなたは何でも出来るのね。お茶の煎れ方から何から私の周りの事でも何でも。」

梅はますます赤くなり答える。

「いえいえそがぁな事困りますけえ言わんさつてくだしあ。私はぬか床なんか作るのは得意ですが文字とかはからつきし読めないですかから…」

梅は永久子の結婚のためにわざわざ富田家がよこした永久子専用の傍女中だ。

公家の娘の世話をさせるくらいの女中なのだからよほゞ自信を持つて送り出したのだろう。

そしてその富田家の選択は間違つてはいなかつた。

「文字なんていくらでも努力すれば出来るものよ。あなたのその才能は私にはないものだわ。大切になさいね。」

梅はまだ赤みをおびた顔で深々と手をついて頭を下げた。  
しかし梅と過ごして一月が経とうとしているがまだまだわからない事は多い。

他の女中とはこの家の人の扱いが明らかに違う。  
年からいつてもこの家の事をよく知る人間に違いないからそのせいかもしけれない。

しかし何か…何かが…

その時後ろでカタンッと音が鳴る。部屋に入ってきた初五郎だ。

「今しがた仕事が終わつたんだが…お取り込み中でしたか？お義母様。」

梅の赤かつた顔がさあつと血の気が引き一気に青ざめた。

「い…いえ、申し訳なあです。只今夕飯の支度しますけえお待ち

くだしゅ。」

梅が慌てて立ち上がったので畳を擦る音がいつもより大きく聞こえた。

「ふん、あの女…どうせこの後親父の所に顔を出すんだろう。」

そう 蔑んで田で皮肉たっぷりに言い捨てた初五郎の田を永久子は見る。

まるで親の敵とでも言いたそうに梅が去つていった方向を憤りしげに睨んでいる。

永久子は理解した。  
梅は…重造の妾だ。

## 第四章 「新居」（後書き）

更新は波がありますが週1〜2回でやっていますがどう。。。

初五郎のキャラ設定に苦労してます。」

## 第五章 「苦痛」（前書き）

富田家と梅の関係を知ってしまった永久子。夕食で起こったある出来事で初五郎は

## 第五章 「苦痛」

新鮮な金田の煮付けが運ばれてきた。  
こおばしく炊けた米と一緒に永久子は柔らかく煮た金田の身をほぐし口に運ぶ。

そしてふと前を向く。

向かい側に座るのは先程の件で機嫌を悪くしたのかずっと眉をしかめている初五郎だ。

今何か話しても何も良い返事は返つて来そうにない。

永久子はゆっくりと味噌汁の椀を手で持つ。

しかしさつきの二人…初五郎と梅の関係だ。

あの時確かに初五郎は梅を射殺さんばかりに睨みつけそれに対し明らかに梅は恐れていた。恐れているといつよりは怯えや…わずかに申し訳無い口調だったのも気にかかる。

多分あの二人の関係はこうだらう。

重造は正妻との間に子を成した。それが初五郎だ。

しかし、重造は正妻の他に梅を妾にして置いておいた。もちろんその事を正妻や初五郎が快く思うわけがない。正妻は五年前に肺をやられて他界したと聞いている。残された初五郎が梅を目の敵にしても無理のないことだ。

永久子はややしつつ向いて溜め息を漏らす。

人間とは救えぬ生き物だ

自分は妾の子である。その自分は過去の結婚により夫が妾を選ぶといふ屈辱を経験している。

そして今自分の夫は母の恨みである妻を敵視している。  
何の因果であるうか？

自分と初五郎は似ているのかもしない。  
一人の男に抱かれた二人の女。

しかし、初五郎は正妻の子で自分は妾の子だ。  
妾と共に暮らす父親の元に住む初五郎にとつて、永久子の生い立ち  
は気に入らないものだろう。

その証拠に、妻として迎えた永久子を初五郎は少々軽蔑している節  
がある。

永久子は更に深く、だが聞こえぬように溜め息をつく。

自分もその愚かな生き物の一人じゃないか。

こんな薄暗い霧のような晴れる事のない問題の渦中に置かれても、  
今回は自分ではなく初五郎や重造達の事だ。

自分の身に降りかからなかつただけで以前とは全く違う安堵感を覚  
えている。

他人事のように考える自分が何とも愚かであるなと永久子は自分を  
責める。

しかし、もし初五郎が女を困つたとしても自分は何も感じないだろ  
うなと永久子は思った。

それ位永久子は初五郎に対して愛情を持てなかつたし興味を示すこ  
とが出来なかつた。

永久子は胡瓜の糠漬けに箸を伸ばす。

その時だ。

「何やつてるんだ！－！」

初五郎が怒鳴つた。

女中が膳に運ぼうとした熱燗を初五郎の膝にこぼしたのだ。

「もつ申し訳ありあせん…」

女中は大層脅えている。ここから見ても体の震えが分かるほどだ。途端に初五郎は立ち上がり女中の顔を思いつ切り叩いた。

バシッと言う音が部屋に鳴り響く。

永久子はびっくりして飛び上がった。

初五郎の平手打ちは続く。瞬く間に女中の顔は腫れていき、やめてくれと懇願して泣き始めた。

恐ろしい光景だ。

「あなた…つおやめください…」

永久子はとつせんに顔を出した。

「もうよろしいじゃないですか。それより濡れた着物を早くお脱ぎになつて下さい。火傷なさつてもかもしませんわ。」

永久子の胸が発作のように脈を打つ。

「…何だと？」

息を荒げて初五郎が聞き返した。

「あなた、私はあなたのために…」

永久子が反論しようとした瞬間だ。

永久子は何が起きたのか分からなかつた。

ただ顔に痛みが走り自分の軽い体が宙に舞い上がるよう強い力で跳ね飛ばされたような感覚を全身に受けた事だけは間違いない。

永久子は殴られたのだ。

自分の夫であるはずの人間が懇親の力をこめて与えた痛み。永久子はしばらく状況が理解できず、ただ見るみる内に赤くなる頬に手を当てる。

「あなた…つ」

夫の顔を見る。

今までに見たことのない顔だ。

不快感を露にし顔を真つ赤にさせている。

眉と目はつり上がり口は今にも罵倒の声を吐き出しそうな形をしている。

「…つるさいつ」

初五郎は叫んだ。

こんな大きな声ではきっと家中に響きわたつてゐに違ひない。

「妻の分際で夫にそんな口を聞く奴がいるか！…！…一度と俺にそんな口を聞くな、わかつたな！？」

永久子の体に震えが走る。何と恐ろしい夫だろつ。こんなつまらない事に腹を立て手を出すなどこれからどうなつてしまつのだ。

いつ弾みで殺されてもおかしくはないではないか

永久子はこの家に嫁いで心底後悔した。そしてどこか冷静な自分が

いるのに気付く。

「ああ、また私は幸せになれないのか」

当然だ。こんな心の中が幾重にも捻れている女がまともな幸せを味わえるはずないのだ。

悲しみや痛みと共に永久子の氣の強い性格の中から怒りと言つものが込みあげてきた。

ああ、夫よ

私の夫よ

私は決してこの事を忘れはしない。

あなたを憎むことを忘れはしない。

あなたが地獄で泣き叫び血の涙に濡れながら阿鼻叫喚を唱えようと私はただひたすらに笑い嘲るだらう。

その日のために私はここにいよう。

このくだらなく魅力的な理由のために私はここで暮らして見せるわ。

永久子は苦しそうに蹲る。

しかしその目は強い光を放つていた。

それが初五郎には涙に見えただろうか？それとも復讐の炎に見えただろうか…

## 第五章 「苦痛」（後書き）

DVDでましたー。。。

毎回サブタイトルに苦労していますorz

## 第六章 「櫛」（前書き）

初五郎から暴力を受けた永久子はますますこの家に対する不満を抱いていく

自分の髪を梳きながら昔の思い出に耽る永久子の部屋に梅が

## 第六章 「櫛」

朝方まだ蒸し暑さが迫つてこない内に永久子は髪を梳き始める。黒々と艶めく永久子の漆黒の髪はどんな着物にも良く合ひ。この豊かな黒髪は永久子の自慢とするものの一つだ。永久子はその髪を上質な細工がこらしてある柘植<sup>つげ</sup>の櫛で丁寧に梳いていく。嫁入りの時に持つてきたこの櫛は永久子が女学生の時から使つているものだ。

伯母が入学する記念にと特別に譲ってくれたもので、もう既に十年は越えているというのに色は一向に色褪せずより渋味を増していく。

「永久子ちゃんは本当に美人ね。将来が楽しみだわ。」

会う度に嬉しそうにそう永久子に話しかけるのが伯母の口癖だ。それは永久子が大人になつた今も変わらない。

父の妹にあたる人だが、寡黙で厳格な父とは違い屈託なく笑う優しい伯母で、若くして夫をなくし子をなさなかつたためか姪の永久子を特に可愛がつた。

伯母はいつも日に当たるとやや栗色に光る髪を綺麗に結い上げ、贅沢のできない家の中でも鮮やかな紅色の着物を身に纏い凛とした美しさを放つていた。

永久子が嫁に行く時も心配そうに色々世話をしてくれて複雑な環境に置かれる事の多かつた永久子にとつて心の支えとなつてくれる人だつた。

しかし、遠方長崎まで嫁いだ永久子はもつ毎日のよつに伯母に会つ事はできない。

これからはこの櫛や永久子の実家から持つてきた思い出の品が頼りだ。

永久子が暮らす十五畳程の広めの和室には永久子のためにと用意された家具の他に東京から持つてきただ馴染みの化粧道具や思い出の詰まつた品が入つた鞄が所狭しと幾つもの転がつてゐる。

永久子はこの鞄や箱から毎日少しづつ物を取り出しては懐かしさにふけるのが日課だ。

寂しくなつた時や辛い時にそつとつたものに触ると心が癒されるのだ。

しかし、最近の永久子はいつものようにそつとつたものに触れるだけでは気分が晴れなくなつてゐた。

原因はあの男だと永久子は顔をしかめる。

永久子に手をあげてから初五郎は徐々に本性を表すようになつていった。痩せやつれた顔で眼鏡の奥から睨むように視線を伸ばす不快な目つき。

見た目と同じく初五郎はかなり神経質で元々精神の方も少し患つてゐるらしくそれとあいまつてかなり達の悪い暴れ方をした。とにかく何か少しでも気に入らないことがあれば女中達に当たり散らし、ところ構わず叫び出す。

永久子は初めにこの家に来た時何故あんなに女中達が暗い顔をしているのかようやく理解した。

「皆初五郎を恐れているのだ。」

それだけが理由かどうかは定かではないがそれが一つの原因であることにまず間違ひはない。

これは中々厄介な問題だな、と永久子は思った。

梅には重造の事もあるし手が出せない。だから初五郎はその鬱憤を代わりの女中達で晴らしているように見える。

しかし、今更梅をやめさせても初五郎の癩癩は治るものではないだろう。あれは生まれ持つた性格も大いに関係しているに違いない。そしてその性格は夜の情事にも深く関係していた。

永久子は生娘ではないし、今更濡事を恥じらうような年ではなかつたが今まで自分を組み敷いたどの男より初五郎の女の扱い方は嫌悪を抱くものだつた。

夜明かりのえしい床の間で永久子の上に乗る初五郎は最悪な野獸だつた。

女をただひたすら自分の快楽の道具として扱い見下す事が初五郎の情事の目的であり、永久子のよつた位の高い女でさえ自分の言いなりなのだと初五郎は得意気な顔をして永久子を玩具のように玩んだ。快感も昇天も与えられない情事が永久子には苦痛だつた。

体の相性もあわないようではもはやこの男についていく意味も見い出せない

永久子の中にはますます初五郎を嫌悪する気持が広がる。  
それを知つてか知らずか日々初五郎は永久子に対する苛立ちを表に出すようになつてきた。

「お前の一派はさぞすごいお方達の集まりなんだろうなあ、これだけの家を落ちぶれさせたんだからなあ。」

毎晩酒に酔い、顔を真っ赤にして綺麗に分けられた七三の髪の毛を額の方へと崩しながらおかしな訛りで初五郎は永久子を責めた。

毎日夕飯に愚痴をこぼしだす初五郎の声を永久子は聞こえない振りをしてじつと我慢する。

永久子はそんなに大人しい女ではない。寧ろ違うと思つた意見にはすぐさま的確に反論し、自分が正しいと思つた事は絶対に譲らない性格だ。

だが、そんな強気な性格も今は身を潜めるしかない。こういう愚かな男の前で正義を通しても逆上されるだけだと分かっているからだ。

永久子はふと鏡の方を向く。

真っ直ぐにすかれた長い髪を左手にもち右手には櫛を力なく握つている。

視界を遮るように生える長い睫の根元を見ると、いつすらとくまのようなものがある事に気付く。

今はそうでもないが、いづれこの影は永久子の透き通りそくなぐらい白い肌のせいであり目立つてゐるに違いない。

このシミ一つない肌もピンと張り美しい輪郭を表す首元もやがてはくすみ弛んでくるのだろうか…？

もし、こんな苛立ちの募る生活が続いたら自分は倍の速さで年をとつてしまつ…

いいや、そんなはずがないと不安を搔き消すように永久子はそのふくらとした形の良い脣に紅を塗る。

こんな暗い気持ちではいけない。外にでも出掛けた憂を晴らしそうかと思つた瞬間襖の向こうから小さい声が聞こえた。

「…永久子さん、ちいとお話をあるんですね…」

梅  
だつ  
た

## 第六章 「櫛」（後書き）

バタバタしてて更新が遅くなりました（汗）  
ケロンパさんコメントありがとうございます  
アドバイス通り勉強しようと思ひます。

## 第七章 「告白」（前書き）

永久子に話があると言つ梅。  
その口から出た眞実に永久子は一

## 第七章 「告白」

永久子は答えた。

「何かしら…どうぞ。お入りなさい。」

「申し訳ありあせん。せつかくのお時間無駄にして…」

梅は首を立てないように注意深く襖を閉め、こちらに手を置いて深く腰を曲げる。

今しがた朝げの片付けが終わつたばかりだからだろ？ 淡い山吹色の着物の上に着けている前掛けに水が撥ねている。

「永久子さんにお話したい事があるんです。」

梅の顔は真剣だ。

白髪が少し入り混じり灰色がかつた髪の毛をきつく後ろに結い、かなり年期の入つた濃い茶色の簪かんざしで留めている。

永久子の櫛の様な思い入れが梅の簪にあるのだろうか？

浅く皺の刻まれた、だが働く手にしてはややか細い梅の白い手が永久子の前に行儀良く揃えられる。

梅はまた深く頭を下げた。

「一体どんな重要な事を話そうとしてるのだろうか…

「…話していらっしゃい。」

梅がゆっくりと口を開き発した言葉は永久子が予測していたものそのものだった。

梅は、自分が重造の妾である事。それは初五郎の母が重造の正妻になる前からそうであつた事。そしてその関係は今も続いている事を  
嗚咽おえつを漏らしながら語つた。

「申し訳ありあせん…。本当に申し訳ありあせん、全てあたしのせいです。この家がこうなったのも全部全部あたしのせいなんですか…」

梅の目から大粒の涙がボロボロとこぼれ、梅はそれを畳に溢さぬよう着物で拭う。

申し訳ないと梅は永久子に何度も頭を下げる。

「重様しげさまは私を拾つてくらさつた優しい方なんですね。私は小ちい(ちいちい)頃に親一人をなくしましてすぐ京に売られて踊り子やらされました。でも十五の時重様がお客様で来てくらさつて私を拾つてくれました。それからは大変良くしていただきやした。住む家も食べる物も、今はこんな素敵な方をお世話させて頂けるようになつて。」

永久子はやや照れ気味に首を横に振つた。

しかし、あの食い過ぎた狸の様な重造を梅がこれほどまでに慕つてつづくことは意外だった。

てつづく梅の方が無理強いさせられてると思つていたからだ。

永久子の読みはだいたい当たつていたが、その一つだけは外れていった。

しかし、それなら梅についてのいくらかの疑問は解消できる。

初老の年であるというのに少女の様な面影を残し、恋する乙女の様な笑顔を見せるのは未だ梅が重造を慕い続けているからだったのだ。梅は他の同い年の女中達と違い、どんな日でも薄く化粧をする事を

欠かさない。

働いてる時の手を見ても、ぼろぼろと節くれだつても良いぐら<sup>に</sup>きつ  
い仕事ばかりのはずなのに、白く良く手入れされている。

これら全ては重造のために梅が常日頃自分を磨いた証なのだ。

「あたしが二十歳の時奥様がいらつさつて重様の元に嫁きました。  
それから一年して初五郎様がお産まれになつて…」

永久子は妾に色々な感情を抱いている。

それは、前の夫が妾を持っていた怒りもあり、その自分が妾から産  
まれたという皮肉も持ち合わせてているからだ。だが、梅に嫌悪を抱  
く事はないだらう。今も、この先も。

何故ならば梅と重造は立場上不貞にとられる関係だが、この二人は  
正妻が来るずっと前から愛し合っていたのだ。少なくとも梅の方は。  
しかし、正妻をめとつた重造は初五郎と言う子供を成した。

梅は何度も別れを告げようとしたが重造はそれを許さなかつたと言  
う。

自分に対しても情が残つてゐる内は自分の側にいてほしいと  
頼まれ梅はここに残つた。

「でもそのせいで彰子さんは大変<sup>あき</sup>立腹なさうした。初五郎様も  
あの様に病んでしまつて…あたしのせいで彰子さんは肺を患つたの  
だと今でも思うとりやす。重様は違うと仰つてくりやしたがあたし  
のせいです。初五郎様が永久子さんに辛く当たられるのもあたし  
のせいなんです。永久子さんの生まれはあたしと関係なあに…そ  
れが申し訳なくて仕方なあです。」

永久子はこの時初めて初五郎の母の名を知つた。

話を続ける梅の顔はすっかり涙で濡れて鼻の頭は真っ赤だ。

永久子は少し羨ましく思った。

梅は恋に生きる女だ。一人の男を愛し、その男に愛されている。それが一つの家庭を壊し、永久子の夫婦生活に影を指す原因となつているとしても愛する想いを止めることができないのだ。

私は梅のように一人の男をこんなにも長い間愛し続ける事が出来るだろうか？

「話してくれてありがとう梅。辛かつたでしょう？でもあなたのしている事は決して間違いなんかじゃないわ。とても素敵な事なの。ね、そうでしょう？だから、これからも一人で溜め込んで駄目。私に話して頂戴。私も辛くなつたらきっとあなたに話すわ。約束よ。」

「

永久子は梅の手を握りそう答えた。それは本心だった。

どの道自分に夫を愛する気持ちなど今も、そしてこれからもないのだから自分が夫に何をされようと関係ない。それよりこの痛ましくも美しい恋を守る方が永久子には素晴らしい事に思えた。

梅の目から止め処なく涙が溢れ出す。一生懸命声を殺しながらしゃくりあげる梅の肩を永久子はそつと抱き寄せ優しく背中を撫でてやつた。

恋とはこれほどまでに辛く、狂おしいものなのか

その狂おしさに触れてみたいと言つ熱が自分の中に生まれた事に永久子はまだ気付かない。

## 第七章 「告白」（後書き）

いつも電車の中で携帯から書いてるんですが、携帯だと難しい漢字が出てこないのでパソコンで編集して投稿しています。完全に二度手間です（＝＝・）

## 第八章 「雨垂れ」（前書き）

雨が降る中読書をしようとする永久子

色々な物事を考へてゐる内に詩を詠もつと梅を呼ぶが・・・

## 第八章 「雨垂れ」

もう梅雨も終りだと叫ぶのに雨が降る。

空気には湿った埃を濡れ落とすように勢い良く地面に落ちてへる雨  
湿気もなく眺めるだけなら雨も中々良いものだ。

この空から降る一滴ひとしづくが生命を潤し星を浄化する。

永久子は鞄に入れて持ってきた自分の本から何冊かお気に入りを選  
び、どれを読もうか迷っていた。そこにこの雨だ。

幸い出掛ける用事もなく家にいたが、この降りようでは外に遣いに  
だされた者はひとたまりもないだろ。本を読むのは明日にしていつそ今日は一日この雨で詩でも詠もつか  
などと考える。

今家に初五郎はいない。

三日前から重造とともに遠く東京に出てこる。重造は自分の会社を  
行く行くは初五郎に継がせたいらしい。

一人息子なのだから当然なのだが、永久子は初五郎にこの会社を継  
がせるのに不安を抱いていた。

初五郎は馬鹿ではない。性格に大きな問題こそあれど、頭もそこそ  
こ切れるし父の下で働く分には何も問題はないだろ。

だが重造は別格だ。普段大口を開けて品とは何かという様子で笑い、  
食事すれば必ず一度は食べ物を置く。それをいつも甲斐甲斐  
しく世話をるのは梅の仕事だ。

仕草だけならまるで赤子のように世話の焼ける重造だが、頭の方は重たそうな体とは反対に非常に良く動く。

さすが、一人で「富田造船所」を築いただけの事はある男だ。経営こそが彼の天賦の才なのである。

富田造船所と言えば今や破竹の勢いで伸び続け、市場占有率を半分越えるかどうかの大企業だ。

そこまで重造一人で伸ばしてきたものを初五郎は維持できるだろうか。

よほど努力がない限り無理である。永久子の将来に少しばかりの影が広がる。

いくら永久子が先を案じてもどうとなる問題ではないのだが、

公家の身分を持ち次期社長の妻という立場の永久子自身に課せられた仕事は今は特にない。

嫁いでから幾度か初五郎の妻として会合や宴会に呼ばれた事はあったが、それもそつなくこなしてみせた。

元々生まれが生まれであるし、幼い頃から叔母に連れられ色々と挨拶回りをさせられたおかげで永久子は大勢の注目を浴び、その中でいかに失礼のないように、恥をかかないように自分を美しく相手に印象づけるかを心得ていた。

長崎で初めて開かれた宴の席で若葉模様彩る鮮やかな深緑色に、金銀の刺繡を重ねた立派な着物を永久子は見事着こなして見せた。

永久子が呼ばれて振り向く度に誰から見られても恥ずかしくないよううにと梅が懸命に結い上げた髪に挿した大きな琥珀玉のついた簪がしゃりしゃりと音を奏でる。

その音に続くようなくずく永久子の涼しくも美しい瞳が流れれる。

一度も都会の土を踏むことなく人生を終えるであらう新しく親戚となつた者達がその姿に魅了されその瞳に囚われる。

人々は日々に永久子を讃めそやし永久子の下に集まる。もしかしたら永久子の人を惹き付ける不思議な魅力こそが本当の天賦の才と言うものなのかもしれない。

永久子は読もうと思つていた本を全て机に置き立ち上がる。雨は一段と激しく降り始めた。雨樋から流れ落ちる水の音が滝のようだ。

詩を詠もつ

もう少ししたらきっと雨は更に酷くなるだろつ。そうすれば風情は雨垂れの音に搔き消され何処かへ消えてしまつ。

その前に詠まなければ

永久子の趣味は非常に文学的だ。

日焼けも気にせず走り回りお転婆過ぎるとたしなめられる友も何人かいたが、永久子はその中に混じることができなかつた。体が弱いわけではなかつたが日焼けをするとすぐに肌が赤くなりひりひりと痛むのであまり長い間外に出る事ができない体質だつた。小さい頃父や叔母が止めるのも聞かずに外で遊びまわつた日は必ず体が火照つて熱を出していた。それが永久子の透き通る程に白い肌の秘密だ。

あまり運動する事のなかつた永久子の趣味が読書だ。本は何処にでも連れてってくれる。

日の当たる太陽の下で思いつきりはしゃぎまわるのも、何処か素敵な異国の国に行くのも、蜜よりも甘い恋をするのも本の中では自由

だ。

そつして得た感動や知識を永久子は時に周りの情景と共に詩に認めしたたる。

それこそが永久子の遊びだ。

硯はある。墨も筆も…だが紙がない。梅に持つてきてもらおう。そう思い梅を呼んだ。

「梅、お願いがあるの。ちょっと来て頂戴。」

すぐに襖が開いた。

そこにいたのは梅ではなかつた。

もつともつと…永久子よりも若い女中だ。

まだ二十歳になつたがどうか。そんなものだらう。  
くりくりとした大きい目がこぢらを見てぱぱぱぱと瞬きをする。  
まるで可愛らしい子りすの様だ。  
新しく入つたばかりのか朱色の着物はまだ新しい色を放つてゐる。  
濃茶の髪は細くするすると上に結い上げられきつと抑えられつやつ  
やと輝く。

「御用でしようか、奥様。」

その女中はあどけない笑顔で返事をした。

## 第八章 「雨垂れ」（後書き）

新キャラ投入です。

ぶつちやけ名前が決まってません（爆）

## 第九章 「瑠璃」（前書き）

詩を詠むため梅を呼んだ永久子。  
だが、そこに来たのは

## 第九章 「瑠璃」

永久子は少し驚いた。てっきり梅が来ると思つていていたのに、見た事のない女中がこちらに向かつてにこにこと笑いかけている。

「新しくこちらに勤める事になりました。瑠璃と言います。よろしくお願ひ致します。」

綺麗な言葉だ。この地方の生まれではない。

久々の標準語に永久子はやや安堵し、だが少し気が引き締まる。

「そうなの。よろしくね瑠璃。じゃあ貴方にお願いしようかしら。  
私詩を詠みたいの。でも墨を垂らす紙がないから持つてきて欲しい  
のよ。」

永久子は瑠璃がどういう人間なのかを見定めようと鋭く瞳を向ける。瑠璃はくじくじとした大きな目で真つ直ぐにこちらを見てにっこりと笑う。

途端に目尻が垂れて少女の様な顔になる。

「わかりました、奥様。只今お持ち致します。」

そう言つと瑠璃は素早く立ち上がり鼠のようににこりよろよろとした可愛らしい動きで部屋を出ていった。

どこから來たのだろう。ここに生まれの顔立ちでもないし、言葉からすると育ちも東京の方だ。

わざわざ東京からこんな場所に來るのは永久子一人だけだと思つていたのに。

永久子は滅多に人に心を開かない。

元々疑り深い性格で、人に騙されたり利用される事を人一倍嫌う性分だ。

良く人を観察し、どのような性格でどんな癖を持ち、それが自分と合ひものなのかを見定める。

ここまでしなければ、人を信じる事の出来ない自分が時に哀れだとも思つ。

だが、過去の経験を思い出せばこの性分を永久子はなくすことが出来ない。

男に・・・そして女にまた騙されるくらいなら少々息苦しくても我慢しようと永久子は思つてているのだ。

そしてこの永久子の厳しい試験に受かつたのは幼き頃から慕う叔母と、ありのままを曝け出し自分を慕ってくれる梅しかいない。果たして今の娘は私の田通りに叶うだろうか…？

そう考へてゐるうちにまた襖が開いた。

「お持ち致しました、奥様。これで良いでしょうか？」

瑠璃は急いで持つてきたのか少し息をきらしている。

「有難う、瑠璃。」

永久子は上品に微笑む。

その顔は雨が降つて薄曇つた空気を搔き消すかのように輝く。

瑠璃が可愛らしいと言つても永久子の美しさは別格だ。

可憐な花を咲かす牡丹よりも、優美に頭を垂らす百合よりも微笑む永久子の姿は美しい。

それに魅せられた瑠璃は恍惚とした表情で永久子を見る。

「どうしたの？ 瑠璃。」

永久子が話しかけた瞬間瑠璃は田を冷ましたかのようにまつと声を出して飛び上がった。

「いっ、いえ、奥様があまりに美しいのです……」

「あら、有難う。」

永久子が感謝した途端瑠璃の顔がみるみる赤く熱を帯びていく。永久子はどことなく梅に似ているな、と思った。真っ赤になつた瑠璃に永久子が問う。

「あなたの言葉……！」の言葉ではないわね。どこから来たの？」

「先日東京から来ました。父も母も東京にいます。」

「東京から」んな所へ？」

「はい、両親は東京ですが、親戚が長崎なんです。向こうの学校に行くつもつはなかつたのでこちらに来ました。」

「やうなの……」

ますます変わつた娘だと永久子は思つた。

両親は東京にいるのだし、永久子の様に強いられて來た様子もない。年端もいかぬ娘が一体何故こんな辺鄙な所に好き好んで來たと言つのか。

まあいい、その内わかるだろ?と永久子は足を崩した。

「話してくれて有難う。仕事の邪魔になってしまったわね。」

「いいえ、こちらこそ相手して頂いて…それでは仕事に戻ります。」

瑠璃が出ていき永久子はふと外を見る。

雨が降る

ぬかるんだ地面に雨は大きな水溜まりを作り、その大きさを増していく。

「雨降らん 我が心に 瑠璃色の 雨音弾む 梅雨の溜まりて」

永久子が筆を取り認めた詩は確かに永久子の心に瑠璃と言つ少女が  
刻まれた事を意味していた。

## 第九章 「瑠璃」（後書き）

遅くなりました；

只今作者テストに終わられて執筆困難な状態に（汗）  
次もまたちょっと遅れるかもしれません。。。

## 第十章 「親戚」（前書き）

雨の中詩を詠む永久子。

梅に瑠璃の事について聞くが・・・

## 第十章 「親戚」

雨の音で田を覚ます。先程まで熱心に詩を詠んでいた永久子は一息ついたまま少し眠つてしまつたらしい。

遠くから味噌汁や煮物の薰りが漂つてくる。もつそろそろ夕食だらうか…

雨の湿氣のせいで氣だるい空気が部屋に流れ、永久子はまだうつらうつらと田<sup>ゆう</sup>が覚めない。

そこに梅の声がした。

「永久子さん、夕飯支度整いましたけど…」

「…有難う、梅。」

寝惚けた声を出すと、梅がすぐに襖を開けた。

「お加減どうなさあました？ 具合でも悪いんでは…」

心配そうな顔で梅が傍に来る。

「何でもないわ。少し眠つていただけなの。」

「ほんとに大丈夫ですか？ 何かお薬お持ち致した方が…」

梅は本当に私を大事に思つているのだな、と永久子はくすりと薄く笑つた。

「気にしないで頂戴。本当に眠つていただけだから。それよりお腹が空いたわ。おいしいご飯でも頂こうかしら。」

その顔を見て梅は安心したよつと安堵の笑みを浮かべる。

「すぐ用意しますけえ、お待ちくださいね。」

そういうちよこじよこと部屋を出ていく梅の姿はやはり瑠璃に似ていた。

初五郎のいない部屋での食事に永久子はふつと安堵の息が漏れる。

こんなにゆつくり夕飯に箸を動かすのは久しぶりだ。

初五郎は永久子のする事全てが気に入らないとでも言つよつに色々難癖をつけてくるので心休まる時などあつたものではない。

「お茶のおかわり用意しますけえ。」

梅が隣でせつせと働いている。

初五郎の件を我慢すれば、この生活も中々かもしれない。

雨の湿氣のせいか梅の首にうつすらと汗が見える。

そのうなじをみて永久子はふとある事を思い出した。瑠璃の事だ。

「…ねえ、梅。」

「はい、何でしょ？」

くぬじと振り返った姿が更にあのくぬじした田の少女・瑠璃につくついた。

「今日用事があつてあなたを呼んだのよ。そしたら、新しく来た瑠璃と言う子が来てね。大きな目と綺麗な髪の子よ。その子がビビとなくあなたに似てたの。仕草なんか特にだつたわ。」

「ああ、瑠璃ですか。」

梅はこり笑つた。

「あの子は一昨日からこちらに勤める事になりました。私の姪なんですね。姉の娘でとにかく器量が良くて。向こうで良い学校出たつちいのにどこにも嫁に行きたくねえとだっこねまして。東京なんかより田舎が良いといふんでしょうがねえとこちらに勤めさせる事にしたんですね。ほんつに変わった子ですね。」

「一人は親戚だつたのか それならばどいか似てゐる顔立ちや仕草にも合点がいく。」

「私が重様に話したらこち来させたらどうかといつてくだつたんですね。」

梅の顔はすぐ幸せそうだ。

本当に重造を慕つてゐるのが分かる。

「あなたは本当にお義父様の事を好きなのね。」

梅が顔を真つ赤にする。

「はつ・・・はあ、とんでもない・・・い、いえ。確かに慕いしておりやす。で、ですが、そのお・・・」

取り乱した梅はわけの分からぬ言い訳を並べている。

素直にはいと言えない初々しさに永久子は梅を自分より年が下の娘子にしか思えない。

そんな梅の様子が永久子は可笑しくて堪らない。

「梅つたら耳まで真っ赤だわ。そんなに慌てなくても良いのに。」

「はあ、すいません・・・」

梅はまだ恥ずかしそうだ。

こんなにもうきうきとした恋の一面を見せる梅を可愛らしいと見る自分と少し羨ましいと思う自分がいる事に永久子はふと気付く。永久子は少し動搖した。

瞳に僅かに暗い色が広がる。

（もう自分には必要のない感情なのだ。この感情によつてどれだけ自分が傷つけられたことか・・・）

永久子はその思いを振り払つた。今の自分にとつては煩わしい感情だ。

恋など・・・愛など、今の私には無縁であり必要のない感情なのだ。恋は女を輝かせる素晴らしいものだと、愛は人を豊かにさせる尊いものだと心の中では分かっている。だが、今の自分にそのような単純であり、だが扱いの難しい感情を支配できる力があるようには思えない。恐いのだ・・・恐れている。愛を。恋を。

まして、初五郎相手にそんな感情を出せという方が難しい。

永久子は何事もなかつたかのように、明るく振舞う。

「 そうなの。だからかしら？ あなた達一人と言つたら本当にそつくりなのよ？ 何が似てると言つたら分からぬけど……そうね、やつぱり田と仕草だわ。他の女中にも聞いて御覧なさい。きつとそう言つわ。 」

「 はあ、実はもう何人かに言われてまして。そんなに似てるでしょうか？ 」

「 ええ。あの娘を見てすぐにあなたが思い浮かんだもの。 」

永久子はふふつと笑つた。

部屋からは珍しく永久子の笑いが漏れている。

永久子にとつて久しぶりの楽しい食事だった。

だが、永久子の笑いの後ろに影が近づいている

明日には初五郎が帰つてくるのだ。

## 第十章 「親戚」（後書き）

ついやく十章です。

中々話の進まない所です・・・

## 第十一章 「帰宅」（前書き）

とうとう初五郎が家に帰る日となつた。  
重造に会えるのを心待ちにしている梅と違い、永久子は初五郎に会  
うのが嫌で仕方がない。  
仕方なく玄関に迎えに出るが・・・

## 第十一章 「帰宅」

永久子は渋く色の入った橙色の帯に手をやり、きつく締め直す。帯の色に合わせて淡い黄色の着物もしっかりと皺を伸ばし鏡の方を振り返る。

鮮やかな温色でまとめた永久子はぱっと華やかに見える。きつちり結つた髪も崩れてはいない。

この格好ならどこに行つても恥をかかず、讃めそやされるはずだ。だが、永久子の顔は暗い。

今日は久し振りに天気も良くなつたというのに永久子の白い顔には影が見える。

永久子は鏡の中の自分と目が合つた。

鏡の中に映る自分は何という顔をしているのだらつまるでこれから冥土に行くような表情だ

永久子の憂鬱の原因はもうじき訪れる初五郎だつた。東京での仕事を追え、昼までには重造と一緒に帰つてくることになつてゐる。

今か今かとそわそわ落ち着きのない梅と違い、永久子は嫌で仕方がない。

「またあの男に会つのか・・・」

永久子はぼそりとつぶやく。

この数日の間、永久子は幸せだつた。

夕時にどやされることもなければ、嫌味をつらつらと垂らされる事もない。

気分によつて叩かれたり、あの鋭く嫌味な目つきで睨まれる事もな

い。

ああ、何故後もつ少しそのままの生活でいさせてくれなかつたのだ  
るひ。

誰を恨むでもないが、恨めしい。

永久子はふうと息をつき、また息を大きく吸い込む。

背筋をしゃんと伸ばし、襖を開けた。

すぐそこには梅が立つている。

早く迎えに出たくて溜まらないという表情が全面にでていて永久子  
はくすりと笑う。

「先に玄関に行って良かつたのに。早くお出迎えの準備して頂  
戴。」

「は・・・はあ、でも永久子さんが・・・」

「私の事はいいから。さ、早く。」

「はい、では失礼・・・」

最後まで言い終わるかどうかの内に梅はぱたぱたと行つてしまつた。永久子にとつては憂鬱でたまらない出迎えも、梅にとつては待ちに待つた恋人に再会できる日なのだ。

それに比べて自分はどうだらう。  
夫に会うといつてこの顔だ。

しかし、そんな事を言つてゐる暇はない。

初五郎が帰つてくる。

もし機嫌が悪ければ、梅が自分にあたるだろ？  
だが、梅は重造を心待ちにしていたのだ。

そんな梅が初五郎に手をあげられるのは可哀想だ。  
今日は代わりに自分が初五郎の相手をしなければ。

足が急に重くなつた様に感じる。

だが行かねばならない。

何事もなかつた様に玄関に立つと、そこには汗だくになつた重造が  
帰つてきていた。

「いやあ～、蒸す蒸す！…たまらん…！…

「…いや雨が降つたんか？空気が湿つちよる…！」

今すぐここでも着物を脱ぎたいと喚く重造を梅は嬉しそうに迎える。

「ようお帰りなさいました。お疲れでそひ。  
お湯沸かしておつますけえ。それとも何かお食べになります？」

「うそ、風呂だ風呂。風呂と飯だ。どひもだ。」

「はい、今すぐ用意しますけえ。」

重造はここにしながら梅に鞄を預ける。

「よつ立つてくれたな梅。お前がこの家にいると安心して仕事がで  
きるなあ。」

「有難うござります。」

ああ、と永久子は息を漏らした。

何と幸せそうな二人だろう。

お互い慕い合っているところも柔らかい空気が流れるのか。

自分にはこんな相手がいただろ？

わからない。忘れてしました。

いいや……いなかつたかもしれない。

「……お帰りなさいませ。お義父様。」

「おお！ 永久子さんか！ 相変わらず美しいのう。

初五郎はもうすぐ着くぞ。」

「そうですか。」

初五郎はまだ着いてなかつたのか。

だが、もうすぐ帰つてくるのかと思つと、また氣分が悪くなる。

「顔色が悪いぞ永久子さん。どうかしたんかねえ？」

「……いいえ、何もありませんわお義父様。

それよりせつからく我が家に帰つて来たんですからどうぞゆつくりな  
さつてください。」

「そうさせてもおつかね。今日はいやに疲れたからこのままぐっす  
りだらり。」

「そうですね。私はこのまま初五郎さんを待ちますから。どうぞ」  
ゆつくり。

永久子はつこり作り笑いをする。

この顔をすれば大抵の人間はこうと騙されてたちまち上機嫌になる。

「おう、すぐ来るから待つちょっとてくれ。もう少しじゃ。」

そう言うと重造は汗だくでふうふうと息切れしながら梅の後についていった。

重造を田で見送ると、永久子はふいと玄関の方を向く。本当だつたら自分も部屋に戻りたいぐらいだが、そうはいかない。今日は初五郎の機嫌を取らなければならないのだから。梅の為に。視線を落としながらそんな事を考えているとじやりっと砂をにじる音がした。

「ああ、待つっていたのか。これは意外だつたな。」

そこには、重造とは逆に涼しそうに立つ初五郎がいた。同じ道を通つてきたとは思えないぐらい汗一つかいていない。いつも通りに視線を見下すようにこちらに向け、やややつれたようにこけた頬は、めつたに上がらない口角と繋がつている。着物で帰つてきた重造と違い初五郎は深い紺色のスーツを着ていた。ただでさえ細い初五郎の身体がますます細く見える。

「どういう風の吹き回しか知らないが……鞄でも持つてもらおうか。」

数日振りに会つた妻にこんな事を言うのだからこの男もまた相当自分に興味がないのだな、と永久子は実感する。

暫く初五郎とてわかつた事だが、初五郎は永久子のような女を大層嫌いなようだつた。

初五郎は人を見下す事を好む。まして女など、どんな優れた才を持

つていようと自分の上に立つなど許さないと誓った扱いだ。

だが、永久子はそれをはいはいと言つて従うような女ではない。それでもその内側にある勝気な一面は隠しているつもりだった。現に永久子は初五郎と話しているときに一度だつて歯向かうような態度を見せたことはなかつたし、良く回るその頭でやつれて気味の悪い初五郎の顔に青筋を立てるような挑発や言い負かしなどをしたこともなかつた。

だが、初五郎は嗅ぎ付けたのだ。

この女は寡黙で従順な女などではない  
見た目こそしとやかそうに見えるが、何か自分に対してもいる  
に違いない

そう嗅ぎ付けた初五郎はすぐさま横柄な態度に変わり永久子をいびるようになった。

永久子にとってそれはたまらなく屈辱であつたが、どうする事もできない。

自分の堪忍袋の緒を切つてしまつ事は簡単だ。

だが、それでどれだけの人間に迷惑をかけるか永久子は知つてゐる。それを思うと、まだ踏み止まれる自分がいた。

「承知いたしました。お疲れでしょう? 食事の用意がしてありますわ。先にそちらになさいますか?」

そう言つて永久子は先程と同じようにこつと作り笑いを浮かべ、初五郎を座敷へ連れて行つた。

## 第十一章 「帰国」（後書き）

2ヶ月近く更新せずに誠に申し訳ありませんでした  
8月いっぱい海外についていたのと、試験期間だったのでお休みさせて頂きました。

連絡する暇がなくて本当にすいません。

今度また間が空く時はちゃんと連絡しますので今後もよろしくお願ひします。

話は自分の頭の中でぼちぼち進んでおります。。。

見捨てずにたまに見ていただけたら嬉しいです！

## 第十一章 「視線」（前書き）

帰つて来た初五郎を部屋へと案内する永久子。酒の勢いに乗つて不満をぶちまける初五郎に永久子は・・・

永久子が初五郎を通した畠の部屋には新鮮な鮪の刺身やぐつぐつ音をたてたすき焼きが用意されていた。

すき焼きの甘い醤油の香りが部屋いっぱいに広がっている。

「今日は」馳走なんですよ。久し振りにあなたが帰つていらしたから。」

初五郎が座ると永久子は初五郎に酒をつきながら言った。

「お疲れでしょ」今日はゆっくりお休みになつて下さいね。」

「…お前はゆつくり出来たるつな。毎日嫌味を言われる事がなくて。

」

できるだけ優しく話し掛けたのにこれだ。

暫く会わないうちに初五郎は更に横柄になつている。

この男は一体何が気に入らないのだろう？

しかし、ここで黙つていたりはいそうですなどと書つてはたちまちこの男は癪癩を起こすだろう。

見抜かれても愛想良くしておくに限る。

「そんな事ありませんわ。夫の帰りを待たぬ妻がどこにいましょう？毎日貴方の事を考えていました。」

初五郎は白々しいとばかりに小さく舌打ちをする。

本当にこの男は救えない。

まあ我ながら本当に下手くそな演技をしているとは思つが…

「…お仕事の方は上手くいって?」

「…いつもの事だ。全部親父だ。大成功だ。」

「そうですか。」

「親父程仕事の才能がある人間はそうはいない。俺にはそれがないから親父が死んだらお前はそんな小綺麗な服着られなくなるかもしらんないな。」

酒が回ってきたのかだんだん初五郎の口調がたるんできた。

昔からこの場所で仕事をこなしてきてようやく東京にも足を出すようになつた重造と違い、小さい頃から都会に何度も足を運んでいた初五郎はあまり方言を使わない。

地元でしか通じない言葉だというのを十分理解しているし、仕事の面でも、何だか聞き取りにくくやたら語尾が変るわかりにくい地元言葉より、いかにも東京らしい清楚な言葉で話した方が仕事の面でも有利だと言う事がわかっているからだ。

実際、ほとんど標準語が話せない重造の傍に、きちつとしたスーツを着て丁寧な標準語を話す初五郎がいる事によつて商談が成立した例も少なくないだろう。

何せ、重造の言葉といえば話が弾めば弾むほど理解不能な御国言葉おぐにいじやになつてくるのだから。

「お義父様は本当に立派な方ですものね。きっと将来は貴方もある才を發揮なさるわ。親子ですもの。」

初五郎は飲みかけの酒が入つた杯をかんつと盆の上に叩き置いた。

「はつお前に何が分かる！？」この家の事なんぞ何も興味がないくせに。親父は腑抜けちまつてるよ。あの婆のせいだな。あいつのせいでもうちはめちゃくちゃだ。あいつが親父から仕事のやる氣まで奪つたら俺が絞め殺してやる。」

「婆」おばあとは梅の事だらう。

永久子は初五郎が梅を相当嫌つてゐる事を再確認した。  
さて、ここで永久子は誰ですか？ その婆とは？ と馬鹿な振りして知らない風に聞き返すか、そんな事言つておやめになつてと梅を庇うべきか・・・どちらがより静かに事を終える反応だらうと考えてみた。

「あなた・・・」

とりあえず永久子はこのまま様子を見ることにした。

「あの女はなー」の家に来た疫病神だ。あいつのせいでお袋は死んだ。親父はそんな事見向きもしないで傍に置きやがる。よりもよつて、お前の女中なんかにしやがつてどんどんあの女は態度をでかくしていきやがる！」

初五郎は酒のせいか怒りに任せて発する暴言のせいか顔が真つ赤だ。結婚してから梅の事をこんなにも具体的に罵つたのは初めてだつた。

「あなた・・・疲れてらつしやるのよ。そんな言い方おやめになつて。今日はゆつくり休んでくださいな。」

できるだけ刺激を「えないよ！」永久子は優しくなだめようとする。「はつお前はもうあの女に操られちまつてるに決まつてるーお前が

今日こんなにも猫撫で声を出して優しそうにしてるのは俺の「」機嫌取りをしてあの女に八つ当たりさせないようにしてるからじゃないのか！？え！？だいたいお前は・・・」

永久子は自分の考えを見透かされ、一瞬動搖の色を出してしまった。うになつた瞬間急に襖が開いた。

「あ、失礼します。・・・お茶を運ぶよう言われたので。」

瑠璃だつた。初五郎の大きな声に若干戸惑いながら遠慮がちに入ってきた。

不慣れな手でもたもたとお茶を運び出でいった。

「あの女見ない顔だ・・・それにこの生まれじゃないだろう？」

瑠璃の言葉遣いで初五郎はすぐに分かつたらしく。

「ええ、先日新しく来た瑠璃ですわ。東京から来たんですの。・・・梅の親戚だとか。」

永久子は一瞬言おうか迷つたが、いづれ分かつてしまつ事だと梅との関係を付け加えた。

「・・・ふん、あの女のねえ・・・」

初五郎が瑠璃の出て行つた後を見た。

その視線はただ睨むでもなく、笑うでもなく何とも謎めいている。

永久子は初五郎の思惑を読み取ることが出来なかつた。

## 第十一章 「視線」（後書き）

これからどんどん新キャラをだしていく予定です！  
・・・が話が進まない；

## 第十三章 「奈落」（前書き）

梅のために初五郎の機嫌を取る永久子。

夜 激しく犯される永久子が落ちていった「奈落」では

## 第十三章 「奈落」

夜

永久子の息がその動きと合わさり激しくなる。

「・・・あつ」

永久子が唇間きつく結つた髪は既にほどかれ絹の様な光を放ちながら畳に広がっている。

隙のない程鮮やかに着付けられたはずの淡い黄色の着物は部屋の隅に放られたままだ。

暗い部屋の中で月明かりによつて白く照らされた永久子の肌にはつすらと汗が滲んでいた。

初五郎の容赦のない責めが永久子の体を貫く。もうどのくらうこうしてこの男の一部を受け入れていい事だらう

服を脱いだ初五郎の体は思つたよりも随分細い。

肋骨が浮かびくつきりとした筋はどこに力を入れていいか容易に分かる。

初五郎は夢中で永久子を組強いている。

だがその目線の先はほとんど永久子には向かない。

永久子もそうだ。

ただひたすら苦痛に耐える。

時折目が合うと永久子の心を読んだよつににやつと笑う。

「気持ちの悪い男・・・」

永久子は抱かれながら吐きそうな程不快な気持ちに陥る。

性欲の処理の為だけに私の体を欲つしているのだろうか。  
その為だけにこの儀式に耐えなければならないのか。  
この男といふ間は一生・・・

このまま行けばいざれこの男との間に子を成さねばならない時が来るだろう。

産まなければならぬのか？育てなければならぬのか？

この男との子供を一生？

何と汚らわしいのだろう。

お互に愛もないのに。この男はこんなにも私を忌み嫌つていいと言うのに。これではまるで凌辱だ。

そう思つた瞬間永久子は急に泣き叫びたい気持ちに襲われた。  
誰かにすがりたい。誰かに助けて欲しい。

誰か・・・誰か・・・！

いない。そんなものは。

私をこの奈落に突き落とす人間は山程いても手を差し延べてくれる人間など誰一人いはしない。

永久子は自分の一生を思い浮かべた。頬に一筋涙が伝う。

いつまでも続く激しい責めに永久子は次第に意識が遠のいていく。

「・・・いやつ・・・」

永久子は辛うじて聞こえる位の小さな声で叫び、気を失つた。

目を覚ました永久子の視界は奈落の底のように暗かつた。

暗い・・・暗く寒い・・・どうして私はここに? 何故?  
誰もいないのだろうか? 助けを呼びたい。

だが何の気配もない。一人だ・・・この暗闇の中で。

「私はどうなるの・・・?」のまま死んでしまうの-?」

叫んでみるが返事はない。

「嫌・・・嫌よ、こんな・・・こんな孤独な場所で。酷い、酷いわ  
!-!」

こだましない暗闇の中で永久子の意識はまた遠のいていく。死ぬの  
か? 何故?

そう、私の生きている日々は余りに孤独過ぎる・・・  
また意識が遠のいていく中誰かの気配がした。

誰か・・・いたのだ。

永久子は体に力が入らない。

ただうつ伏せて倒れてしまつていて。起きたくても起き上がり  
立ち上がる力を抑えるように体が重い。この金縛りの様な感覚は何  
なのだろう。

永久子が懸命に頭を上げようとしているその誰かはゆっくりと永  
久子に近付いた。

そして永久子の手を優しく握った。

暖かい・・・男の手だ。

その男は永久子の体をゆっくりと持ち上げ、どこかに運ばうとして  
いる。

この男は誰なのだろう？誰だかわからない……初五郎ではない。私の知らない男だ。まだ会つた事のない誰かが私を運んでいる。

「貴方は……」

「誰？と問い合わせようとした瞬間目を覚ました。

「奥様……奥様っ……」

目を開けるとそこには顔面蒼白の梅と瑠璃がいた。

「大丈夫ですか！？何だかとても魘うなされてらっしゃいました。」

瑠璃が心配そうに永久子に話し掛ける。

「……大丈夫よ」

永久子はやつとの事で返事をする。

やはりあれは夢だったか。

先程は混乱していたからわからなかつたがあんな事が現実であるはずがない。

とするとさつき運ばれたのも夢だったのだろうか？

「瑠璃……何しつる……はよ奥様に羽織り……」

必死の形相の梅が瑠璃を叱咤した。

永久子は自分の体を見た。服を来ていない。裸のままだ。だから夢の中であんなに寒かったのか？

「本当に酷い・・・初五郎様は・・・」

梅は涙を滲ませている。

どうやら初五郎は昨日散々永久子を犯した後裸の永久子をそのままにして出掛けているらしい。

「寒いわ・・・」

永久子の体が震える。

「今暖かいお茶をお持ち致しますけえ、辛抱なさつてくだしあ。瑠璃、はよー！」

梅が瑠璃を急かすと瑠璃は慌ててお茶を沸かしに母屋の方へ走つて行つた。

「明け方頃に初五郎様が部屋から出てきたんで、不思議だと思ったんでしあ。でも永久子さん起こしてしまふから確かめなかつたらこんな・・・永久子さんは大切な富田家の奥様なんにあんな仕打ち酷いこつです。」

梅は本当に悲しそうだ。自分のせいで永久子がこんな寒い思いをしてしまい申し訳ないと何度も謝つてきた。

「梅、貴方は関係ないのだからそんな事やめて頂戴。」

「でも・・・」

「良いのよ。ただあの人私が私の事を気に入らないだけなのだから。」

あの男・・・私が死ねば良いとでも思つたのだろうか？

いくら梅雨の残つた蒸し暑い夏と言えど裸で放つておけば風邪を引く事くらいわからないのだろうか。

まして永久子の体はそこまで丈夫には出来ていない。

ふざけた男だ。

永久子は梅が用意した着物の袖に腕を通した。

一方梅にお茶を頼まれた瑠璃はまだ母屋に留まりお茶を煎れるのに手こずつていた。

「あつひーー！」

沸かしたお湯を入れてすぐの急須の蓋を思いつきり掴んでしまった瑠璃は慌てて手を放した。

ガチャーンッ

落ちた急須の蓋がけたたましい音を立てて床に飛び散る。

「ああ・・・」

瑠璃は慌ててしゃがみ急須の欠片を拾い集める。  
集められた欠片はかちやかちやと音を立てている。

「おい、お前。」

瑠璃が振り向くとそこには初五郎が立っていた。

「は、はい・・・」

足音もなく忍び寄った初五郎に急に話かけられて瑠璃は飛び上がりんばかりに驚きながら返事をした。

「あ、あの・・・すいません。急須が熱くて・・・」

瑠璃は初五郎に急須を割った所を見られて怒られると思つたのだろう。

しどろもどろになりながら事情を説明する。その様子を眺めながら初五郎は田を光らせた。

「お前・・・瑠璃とか言つたな。」

「はっはい、先月東京から参りました。萩野瑠璃と申します。ここに長く勤めている叔母の萩野梅の縁で働くかせて頂いております。」

初五郎は何も言わない。

ただ、瑠璃をじっと見るだけだ。

舐め回すような視線に瑠璃の小さい体は更に小さくなる。

「あ・・・あの・・・」

初五郎が一步ずつ瑠璃に近付いていく。

「・・・初五郎様?」

怯える瑠璃の大きく丸い瞳には不敵に笑う初五郎が写っていた。

## 第十三章 「奈落」（後書き）

今回は永久子の中にある永久子自身が気付いていない心の闇を少し書いてみました。

孤独でない人間は一人もいないと思います。

ただ、その孤独の度合いが違うだけなんですね。きっと。

## 第十四章 「読心」（前書き）

風邪で体調を崩した永久子の元に封筒が届く。  
その中身は・・・

もつねるねる梅雨明けの空氣もどび、今年は少し乾いた夏になりそうだ、と永久子は自分の寝床に潜りながら思つていた。

もう太陽は遙か上に昇り、昼を告げているが永久子は寝巻き一枚に薄い布団をかけ横になつてている。髪を下ろしてまとめ、いつものきつちりとした着物姿ではない永久子は何時もより若く見える。化粧をしていないせいだろうか。

少し咳き込みながら永久子は寝返りを打つた。

そう、永久子はこないだ初五郎に裸のまま一晩置き去りにされたせいで案の定風邪を引いたのだ。

しかも、こじらせたらしく長く咳が止まらない。

激しい咳が続き、最後にけほんっと軽く咳をしてまた寝返りを打つた。

「ふう・・・」

初五郎め・・・あの男・・・

永久子は怒りが治まらない。

もし自分の夫を好きにしていいという許しが出たなら永久子は真っ先に初五郎を近くの川に突き落とすだろ。一晩中自分と同じ田に合わせてやるのだ。

後はどんな酷い目に合わせてやろうかなどと永久子が叶いもしない復讐を思案していると梅の声が小さく聞こえた。

「・・・永久子さん、起きてあすか?」

「・・・ええ、大丈夫よ。どうぞ入って頂戴。」

そろそろと襖を開け、梅が入つて來た。

「起こしゃしたか？御加減の方どうでありますか？」

「そうね・・・大丈夫とは言えないわね。」

咳をしたばかりの擦れた喉で、永久子は小さく返事をした。

「そうですか。そう思つてお薬お持ち致しやした。」

「薬？ それならさつき飲んだけれど。」

「いえ、そつちでなくこつちであります。」

そう言つて梅が見せた茶色の大きな木盆の上には一杯の湯飲みに入つたどす黒い色をした液体が入つっていた。

「・・・これは？」

さすがに永久子もあら、ありがとうと氣持良くなは受け取れない色だ。

「私が昔から作つとりやす煎じ薬です。特に風邪には良くな効きますけえどさつて召し上がつてください。」

梅はにこにことその泥の色そつくりの煎じ薬を永久子の方に差し出した。

「・・・何が入つてているの？」

永久子は顔をこわばらせた。

「それはもう色々と…長年選び抜いた体によか物をどつさりいれと  
りやす。いつも馴染みに分けてもらうとる朝鮮人参や萩の草なんか  
であります。」

「…これ、飲まなきやいけないかしら?」

永久子は出来たら飲みたくないと言う意思をさりげなく梅に伝えて  
みた。が、梅にはその意思は伝わらなかつたらしい。

「はい!是非飲んでください。永久子さんのお体がはよ良つなるよ  
う一生懸命に作りましたけえ。」

永久子は降参した。そこまでして梅が作ってくれた物を無碍にする  
のも悪いし、こんなに梅が気合いを入れていると今断わつて  
も永久子が寝ている間に無理矢理飲まされかねない。

「分かつたわ…飲みます。」

観念して器を受け取つた永久子を見て梅はとても満足気だ。

永久子は煎じ薬の入つた湯飲みを見ながらごくりと唾を飲み込んだ。  
もちろん煎じ薬を飲みたくてそんな事をしたわけではない。

永久子は目を瞑りえいつと一息にその煎じ薬を飲み干した。

・・・苦い。

今まで自分が味わつたどんな物をもしのぐ苦さだ。

苦さの余り永久子は思いつきりむせて激しく咳き込んだ。

梅は急いで永久子の背中を擦る。

「大丈夫ですか！？ そんなきなり飲み干しては咽せますわ。」

そのせいぢやない、と永久子は言いたかつたが声が出ない。息継ぎも危うい。

「みつ水を・・・！」

永久子は涙目になりながら精一杯の力を振り絞り言った。  
水で苦味を流し、ようやく落ち着いた永久子はまた布団に横たわる。

「とつても効きそうだけど・・・ 今度はもう少し少なくて良いわ。  
余り多くは飲めそうにないから。」

ますますやつれた顔になつた永久子を見て梅は心配そうにしている。

「量が多すぎたかもしづやあせん。でも、きつとこれで良くなりますけえ。」

梅が湯飲みを片付けていると、他の女中が入ってきた。

「失礼しりやす。奥様に郵便ですか。」

そのやや若い女中は手に茶色の大きめの封筒を持っていた。何か冊子が入つていそうな大きさだ。

「何ですか、奥様は風邪ひいて臥せつておりやす。後にしなせえ。

「

厳しく叱る梅を永久子が制した。

「良いわ梅、ちょっとあなた。その封筒の差出人はどなたなの？」

その女中は急に永久子に話し掛けられて戸惑いながらも「もーもー」答えた。

常に永久子の側にいて世話をする梅の様な人間はさすがにもう慣れただようだが、永久子の身分とその美しさにこの屋敷の大抵の人間はまともに返事を返す事が出来ない。

「はっはい、えっと・・・えっと・・・」

「何、早くしなせえ。」

慌てて封筒を引っくり返し差出人の名前を探す女中を梅が急かす。

「あ、ありやした。えっと・・・うた・・・」こうと書いてありやす。

「ちょっとお見せ。」

永久子は急に跳ね起きその女中の手から茶色の大きめの封筒をふんだくつた。

急いでその封筒に書かれている字を確認するとさつき女中が読んだものよりもっともつと長い文章でこう書かれていた。

「ああ・・・」

永久子は嬉しさの余り大きな溜め息を漏らし、女の方にくるりと振り返った。

「良く持つて来てくれましたね。本当に有難う。苦労様。元の仕事に戻つて頂戴な。」

急に満面の笑みを向けて感謝された女中は驚きながら小さく返事をして部屋を出て行つた。

直ぐに永久子は茶色の封筒を丁寧に指で開け、中身を確認する。中には、細く上品な毛筆で「詩心」と書かれた厚めの冊子が入っていた。

表紙には夏の花である朝顔の水彩画が描かれている。永久子はその冊子を大事そうにぱらぱらとめぐり、ある所でぴたりと手を止めた。

「ああ・・・ああ、見て頂戴梅。何て素敵な事なのかしら。」

永久子は自分の見せたい所を指を指しながら梅の鼻の前まで持つて來た。

「ううむ、ここに私の詩が載つているの。何て素敵なんでしょう。とても素晴らしいわ。」

永久子は風邪などすつとんでしまつたかの様につきつきしている。「詩心」は梅が作った煎じ薬より良く効いたらしい。

「私が詩を詠むのが趣味なのは知つていてるでしょう。これはね、私が東京にいた頃から毎月愛読している冊子なの。とても良い詩ばかりでね、詩を送つても中々載らないのよ。私が今まで送つたものも

一度も載せてもらえたかったわ。

でも見て頂戴。ここに私の詩が載つているのーとても素晴らしいわ  
！」

永久子は嬉しさを抑えきれないらしく頬を赤くして興奮している。

「それは素晴らしい事ですねえ、ほんつに素晴らしい事です。  
ここに嫁ぎらした日から良く詩を詠んでましたからねえ。とても素  
晴らしいものばかり。」

梅も嬉しそうにここに笑う。

「ふふつ、そうね。ここに来てからはすっかり詩の世界に耽つてしまつて・・・何て素敵な文学なんかしら。本当に素敵・・・」

梅が出て行くと、永久子は詩心を自分の寝床の横に置き、寝付くまで嬉しそうに眺めていた。  
自分の詩が載つた。自分の詠んだ詩が。

それは永久子にとって久しぶりに感じた誰かに認められたと言つ喜  
びだった。

## 第十四章 「虚心」（後編）

またサボつてしまひました；  
いかんですね。ちょっと間が空くと。  
早く更新しようと始めを受けたので就寝前に更新。  
頭の中ではどんどん進んでこくに自分自身が置いてかれてる感じ  
です。  
携帯で打つの面倒くわ。

## 第十五章 「空間」（前書き）

詩心しじんに自分の詩が載り、浮かれた永久子は過ちを犯す。  
その過ちとは・・・

## 第十五章 「空間」

富田家の屋敷の一一番奥の一室が永久子の部屋だ。

永久子好みの装飾に彩られたその部屋は重造がわざわざ職人に作らせた家具の他に新たに大きな本棚が置かれ、一人で使うのには少し大きめの書斎机が上品な艶を出し光っていた。

この一つは永久子自らが長崎の有名な職人の所に注文し作らせたものだ。自分は文学が好きだから、たくさんの本をしまっておける本棚と詩や文を書くための机が欲しいと初五郎に頼んだのだ。

一人きりで話していると自分を何か卑しい動物の様な目で見下し相手にしてくれない初五郎も重造の前では普通に接してくれる。

それでも充分そっけないのだが。

だが、永久子はそれを上手く利用してわざと重造を囮んだ食事時に切り出した。

「貴方、わたくし私お願ねがいがあるんですの……」

初五郎の動かしていた箸が止まり、額の筋すじが一拍脈を打つ。

「おお、何だね永久子さん！何か買つて欲しいもんでもあるんか？何でも買つたあれ初五郎！お前ちゃんと奥さんに甘えさせとるんか！？いかんぞ初五郎！」

初五郎と永久子がそれなりにうまいひつてると思つてゐる重造は騒々しく初五郎を急き立てる。

持つてゐる茶碗には梅が溢れんばかりに大盛りによそつた炊き立てのご飯が既に半分なくなつてゐる。

いつもは煩わしい顔を見せながら面倒な事は無視を決める初五郎も父親の言う事はある程度聞くらしい。

「分かつてゐる。何でも買ひつい。理むものなら何でも。」

「でも離縁はさせないんでしょう?」

俯きながら永久子は心中で嫌味を言った。

「わたくし私の欲しいものは……」

そう口を開いてから一月後に届いたのがこの本棚と机だ。

欲しいと言つたその日に重造の命令で梅が手配した。

梅が連絡役なのを良い事に永久子はしつかりとした上質の無垢の木が良い、塗りは丁寧な拭き漆にして欲しいとあれこれと希望を述べた。

そうして出来上がつたのが目の前にあるこの本棚と机である。

夏も終わりの方に傾き始め、蝉の鳴く声も小さくなつてきただが、まだ十分に残る湿り気のない暑さの中でもこの書斎机はひんやりとしていて気持ちが良い。

永久子はこないだ詩心に自分の詩が載つた事ですっかり浮かれていた。

この新しい机の上からこゝつもの素晴らしい詩を自分の手で作り出すのだ、と思うとうきうきしてくる。

長く味わつたことのない高揚感が永久子の体を満たしている。ようやく自分の没頭できる空間が作れたのだ。

永久子はほとんどの時間を自分の部屋で過ごすようになった。

そしてその部屋の中で過ごす時間の大半を詩を作る事に費やす。それが永久子の至福の一時であり、一人でいる時自分を保つための唯一の方法となつた。

「縛られし 我が心の傷 癒されず 尚も深く 痛み覚えん」

「かの夢に 押される我が身 朽ち果てぬ 行く手遮る 数多あれども」

永久子は次から次へと多くの詩を詠んでは詩心に投稿した。

それは、初五郎に嫌がらせを受けて苛立つてゐる時に捌け口る為に詠んだ詩であつたり、詩人を夢見る自分の理想を詠つた詩だつたりした。

永久子はようやく自分の居心地の良い空間を見つけられた様に感じた。

そして永久子の詩は徐々に詩心に載る機会が増えていき、「永久子」の名は次第に広まつていった。

永久子は詩心に自分の詩を送る時自分の名前を「永久子」のみにして送つっていた。それは自分の空間に「富田」の姓を入れるのが嫌だつたからだ。

しかし、有数の公家の一人娘であり、全国でも指折りの大会社の後取り息子と結婚した永久子の話題性を世間が放つておくわけがない。だ富田永久子が詩人である。」

と言ふ話は瞬く間に広がり富田の家には多くの新聞社や雑誌の編集部や永久子の詠んだ詩に対する便りが全国各地から送られてきた。

「見て頂戴な梅。この便りは東京から届いたものよ。私の詩に感銘を受けてくださつたんですね。」

自分の力が全員に認められたわけではない。中には、ただの興味本意や冷やかしの人間もいるだろ。」  
いずれ詩だけで認めさせる事が出来ればそれで良い。

永久子は今富田家の広く狭い籠の中から抜け出し、外の世界と関係

を持てた事だけで満足だった。

しかし、その充実した日々とは逆に富田家の中での永久子の居場所はどんどん狭められていた。

いつも重造は母屋で過ごしている。

元々そこで過ごしていたわけではなく、永久子が来るにあたって新婚の二人の場所を作らなければならないだろうとわざわざ母屋に越したのだ。

しかし、永久子にしてみれば何で余計な気を使つてくれたのだと言う思いでいっぱいだ。離れに重造の目が届かないせいで永久子に対する初五郎の扱いは更に酷い事になっていた。

昼間から堂々と永久子に何かすれば梅によつて重造の耳に入る事が分かつている初五郎は夜にその牙を見せた。

声が漏れないようにしつかりと雨戸が閉められた寝室からは永久子の呻きにもとれる喘ぎ声が毎晩の様に聞こえた。

「い・・・つやですっ」

永久子は必死で意識を失わないように目を開く。

目の前には暗がりの中永久子の体に爪を立てる初五郎が此方を見ている。

その目は氣の狂つた悪魔の様な目をしている。

爪で搔きむしられた乳房からは僅かに血が滲む。

「・・・あなたっ・・・やめて・・・」

悔しい。こんな男に何故こんな事をされなければならないのか。

何故私はここで陵辱を受けているのだ。

沸き上がる憎しみに似た悲しみを永久子は必死で抑える。

自分さえ我慢すれば何も起こらないのだ。

富田家も佐原家も私達の間に事に気が付かなければ丸く治まる・・・

「嘘をつけ・・・」

初五郎が冷たく暗い声でぼそりと言つた。

「え・・・?」

永久子は何と言つたか聞き取れなかつた。

「嘘をつけこの淫売がつ・・・その大人しそうな仮面をとつとと脱いだらどうだ?! それとも剥ぎ取つてやるうか!?!?」

永久子は何を言つてゐるか分からぬ。

「一体何の話を・・・?」

そう言いかけたその時初五郎は永久子の首に手をかけた。痩せこけた体の何処にこんな力があるのだろうか。初五郎は思いきり永久子の首を絞めた。

「・・・つー!」

永久子は息が出来ない。白く透き通るような永久子の顔がみるみる赤くなつていく。

殺される

息が出来ず、意識も朦朧として来たその時初五郎が避けんだ。

「俺を馬鹿にしているのか！？あの本に載せたのは俺の事だらう！？」

？」

しまつた、と永久子は思った。顔にも出ていたかもしない。  
永久子はようやく初五郎の怒りの原因を理解した。

初五郎は詩心を読んだのだ。

詩心には自分の生活を織り混ぜた詩も載せている。  
初五郎は永久子が初五郎に対する愚痴を吐いた詩を見たに違いない。  
それでこんなにも気が狂つたように怒っているのだ。  
自分は何と浅はかな女なのだろう。

浮かれ過ぎて一番気を付けなければならぬ事を忘れていた。  
詩心は何も文学を好んだ女人だけの読み物ではない。

あれだけ話題になつてているのだ。

初五郎があの本を手にすると語り事態も考えねばならなかつた。

「ち・・・がう・・・」

本当は違わぬが、今肯定したら本当に殺されるだらう。  
永久子は息の出来ないその喉から必死に声を出した。

「よくも恥をかかせたな大人しそうな顔をして！お前は俺をそう思つていたわけだらう！？富田の金をむさぼる卑しい一族め。」

初五郎が喚いている。

だが、永久子はもう答える事が出来なかつた。永久子の首を絞めて  
いる初五郎の手に更に力が入る。

このまま死ぬのだろうか？

死んだら何処へ行くのだろう？

このままこの男に殺されるのか？

こんな最低な男に・・・？

自分はどんな一生を生きて来たのだろうか？

悔いなく死ねるのか？

いや、このまま死ぬのだけは絶対嫌だ。

絶対にこの男から逃げてみせる。

自由になつてみせる。

精一杯の力を振り絞り初五郎の手首を折れそつなくらい強く掴んだ  
まま永久子は意識を失った。

## 第十五章 「空間」（後書き）

いつも後書きを書くのを楽しみに更新してるんですが毎回書くネタ

が思い浮かばなくて…」に一番時間がかかるてる気がします。。。

何かお題とかないかな。。。

あ、今後も引き続き「女に生きた女」をよろしくお願ひしますー。（宣伝？）

## 第十六章 「強制」（前書き）

激しく初五郎に折檻を受けた永久子。  
衰弱した永久子は

## 第十六章 「強制」

身体中が痛む・・・  
何時間折檻のような夜伽を受けただろうか?  
自分でもしくじつたと恥ずかしくなる。

昨夜初五郎は永久子が詠んだ自分に對する愚痴を詠つた詩を見て激怒し一晩中永久子に暴力を振るつた。

永久子の艶のある真つ白な素肌は初五郎の怒りの傷痕で所々赤黒く変色している。

初五郎は永久子の想像以上に理性をなくすと手のつけられない人間だつた。

あの男は危険すぎる。昨夜の仕打を思いだし永久子は大きく身震いする。

その身震いでさえ永久子の弱り切つた身体に鋭い痛みを走らせる。

「・・・・・」

永久子が身体中に走る痛みに堪えながらゆっくりと起き上<sup>ひま</sup>がると裸<sup>ふすま</sup>が勢い良く開いた。

「ぐずぐずするな、早く着替えろ。」

昨日の怒りに満ち赤い顔をした初五郎は消えていたが、代わりにいつもより更に冷たく青い顔で此方を睨む初五郎と目が合つた。

既にきつちりとした背広に着替えている。いつもと同じ仕事に行く様な服装だ。

永久子をさげすんだ様な目で見ると、初五郎は無言で裸を勢いよく閉めて出て行つた。

「はい・・・」

いなくなつた襖に向かつて永久子は小さく返事を返した。  
どうすれば良いのだろう、この男から逃げるには・・・

今までどれだけ事態が険悪になつても何とかそれを避ける事が出来  
ていた。

「自分さえ我慢すれば良い」と言い聞かせて怒りや恐怖に満ちた感  
情を抑えてきた。

だが、もう駄目だ・・・このまま事を荒立てずにやり過ごすなど、  
自分の気持ちを知られてしまつた永久子には耐えられない。  
詩心を見た事によつて、これで初五郎はいくらでも永久子に折檻す  
る事が出来る権利を与えたのだ。

玩具を与えて子供の様に喜ぶ初五郎の姿が目に浮かぶ。

また昨夜の様な拷問が起こつたら今度こそ命を取られかねない。

今の永久子にはいつもの様な自身が消え失せただ恐怖のみが支配し  
ている。

だが、こうしている場合ではない。早く全てを隠さなければ。

梅に気付かれないように永久子はさつと身支度を整えて上等な着物  
を選ぶ。

さて、どれにするか。

ずきずきと痛む身体を引きずりながら永久子は着物を選び始めた。  
よりによつて今日は初五郎の仕事関係の集まりに妻として一緒に出  
なければならないのだ。

親しい者達だけの会だと聞いているが、店はかなり豪華な所を選ん  
でいるらしい。

それなりの格好をしていかなければ富田家の者として恥をかく事に  
なるだろう。

永久子は昨日選んでおいた数着の着物を一着ずつ手に取り確かめる。

紺色か桜色がいいと思っていた。

どちらも斬新であるし、特に紺色の着物の方は濃く藍色に近い紗綾さわ形がたが彩がたられ落ち着きがある中に

しつかりとした印象を残せる中々の着物だ。

だが、今の永久子の身体はそこかしこに傷いたがある。

しかし、初五郎もわかつていたのだろう。見える部分に目立つ傷はない。

でももし袖がめぐれてうつかり赤く腫れた腕など見えよつものなら大事おおことになるだろう。

それどころも絶大な権力を誇る富田と古くから名を知られた佐原家の結婚で注目を浴びているのだ。

いくら普段の集まりより人が少ないからといつても噂はビンから立つのかわからない。十二分に注意すべきだ。

永久子は濃い朱色の着物を選んだ。こここの女中がいつも着せられているような朱色ではなく、もっと深くもっと上品な朱色だ。

朱色というよりは寧ろ茜色に近いだろうか？透き通りそうな緋の色の入った着物は薄い金色の上品な雪輪模様が入っている。

これなら痣が見えても隠せそうだ。

永久子が手早く着物を着つけ、髪を梳いていると、梅の声がした。

「失礼します。」

梅が襖越しに挨拶をしてきた。

いつもより気分が良いのか襖ががらりと勢いよく開いた。

「おはようございあす。永久子さん、そろそろお出かけの支度し度どをし  
て頂きたいのであすが。」

梅が何も知らない無垢な顔で此方を見る。

その顔を見た永久子は何故かただただ子供の様に泣きじゃくりたい  
という絶望的な感情に襲われた。

だが、駄目だ。きっと梅は自分以上に激しく落ち込んでしまう事だ  
ろう。

何も悪くはないのに泣いて自分を責めるに違いない。梅は優しすぎ  
るから。

梅とて辛いだらう。好きな男と籍を入れる事もできずだが近くに身  
を置かなければならない。

恋い慕う男の息子には忌み嫌われ、おまけに私の様な人間の世話ま  
ですることになったのだ。

永久子は自分らしくもないと思いながらも悲観的になる。

梅はきっと優しく弱い人間だ。自分の事でさえ耐え切れず折れてしま  
いそうな纖細な心を持っているのに私の問題まで抱えてしまって  
は梅の心労は更に重くなってしまうだらう。

梅にはこの先自分がどんな目にあおうと黙つてしようと思つた。

しかし、今これだけ可哀想な人間が自分を置いて他にいるのだろう  
か

いつもは意志の強さで多少の荒波を切り抜けてきた永久子だったが、  
昨夜の仕打ちで相当心が弱つていて。

こういう時に自分はやはり女なのだな、と思い知らされる。

しかし、その素振りを見せるわけにはいかない。結局は今までどおりに過ごしているのが一番いい方法なのだ。

「ええ、今しているわ。髪を結つのを手伝つて頂戴。」

永久子は微笑む元気すらなかつたのだが、梅は勘が良く、少しの演

技ではすぐばれてしまうので、

いつもより更に笑顔の皮を被り永久子はにっこりと笑った。  
永久子の黒く艶めく髪が梅の手によつて綺麗に結われていく。

「今日は色々お偉方えらがたがいらっしゃるそうですねえ。」

「そのようね。私はまだお会いしたことがないけれど・・・野本八夜わたくしのまとはさんがいらっしゃるとか。」

「野本八夜！それはそれは・・・私でも知つてあります。有名な学者様で論文いくつもだしてるとか。ここいらの者は字が読める人間が少なあですから何の勉強だか知りやあせんが。」

「野本八夜さんはね。とつても偉い生物学者の方よ。私もあまりそういうのは詳しくないのだけれど全国の学会で発表なさつたり論文で幾つも賞を頂いてる方なの。一度の方の本を読んだ事があるけれど、真面目に勉強してらして、素人の私でもとてもわかりやすかつたわ。お会いできるといいわね。」

野本八夜の父親もまた有名な学者だ。

八夜の父、幹成みきなりと重造は昔からの友人であると言つ。

利口な学者と金を生む天才の縁がどこから始まつたかは知らないが、

野本八夜はその関係で今日の会に出席するらしい。

永久子は知識を持つ人間が大好きだ。

野本八夜の本は理学の事を知らない永久子でも何か撲くすぐられる魅力を秘めていた。

実際にあつたらこの男はどの様な事を話すのだろう、どの様な知識を持っているのだろう？

それは永久子の知識に対する意欲を満たしてくれるだろうか？

久しぶりに学の交換が出来る相手を見つける事ができるかもしけない・・・

そう考へると今日の沈みきつた気分も少し晴れてくる。

ぼろぼろになつた体を綺麗な着物と飾りで装いいつもと変わらぬ美しさで永久子は梅と共に初五郎と重造の待つ門へと向かつた。

## 第十六章 「強制」（後書き）

また随分更新が開いてしまってすいません  
友人に催促されまくったので更新です。  
ただ書いてないだけで、話が行き詰ってるわけではないのでどうぞ  
ご安心を（笑）

## 第十七章 「八夜」（前書き）

重造、初五郎と共に列車に乗った永久子・・・  
着いた宿で永久子は初めて八夜に会い

## 第十七章 「八夜」

永久子は重造や初五郎と共に列車に乗り、目的の場所へと向かつた。今日は、重造と初五郎が古くから関係を持つ仕事の相手や友人などが招待されているらしい。

長崎でも老舗の宿を貸し切つたらしいが、来る人数はせいぜい三十人程度だという。

これだけの企業なのに、それだけしか招待しないのだからほとんど身内同然のものばかりなのだろう。

私がまだ紹介してもらつていらない者も多いのだろうか？

永久子はやつぱりその中でも野本八夜のことが気になつていた。

八夜は最近東京の学会で発表し、そこでもかなりの人気を博したと言つ。

今回もきっと八夜の所に人が集まるに違いない。

だが、それに搔き消されない程度に且つ富田家に恥をかかせないよう永久子は目立たなければいけない。

それが永久子の富田家での仕事の一つでもあるのだから。

永久子は俯いた顔を少し上げ、ちらつと初五郎を見る。

初五郎の顔は、相変わらずの仏頂面で全く表情が動かない。

昨夜の事は何もなかつた事にしているらしい。当たり前なのだが、あれだけ恐ろしい姿を見せておいてよくもまあ何事もなかつたようにこの男は済ましていられるものだ。

永久子は嫌悪の気持ちでまた目を伏せ俯いた。

何も知らない重造はしきりに初五郎に今日集まる人間について話をしていた。

「お前そんなにいつもより人が集まらねからつて仏頂面さげてちゃいけねえ。まあお前はいつも顔変わらんからな。だけんど、今日は

今日で偉いんばっか来るんだし、俺の友達も多い。八夜も来るしな。よう持て成しとけ。」

それからの重造はすごかつた。

一人一人の来客の情報を重造はすらすらと上を向いて読み上げていく。

どんな仕事をしているどんな人間であるか、その見た目から食べ物の好き嫌い、嗜好品まで言葉に詰まる事なく喋り続けていた。目的の駅に着くまで重造はずつと喋り続け、初五郎でなく永久子でさえ今日来る一人一人の人間が頭に入つてしまつた。

「八夜ん事は話さんくてもわかっちゃるな、最近はあいつ忙しそぎてめつきり会つちらんが。

きつと変わらず良い奴じやう。俺はあんま学問ちゅうのができねえ。字もとんと読めねえし、難しい紙切れはお前に任せつきりじや。だが、八夜のやつとる学問ちゅうのは中々面白い。俺みたいな阿呆でもわかりやすいようにあいつは言つしな。お前も良い機会じやからまた聞いとけ。そういうやあいつの好物の酒は出とるかな。あいつはあの顔でうんと濃い焼酎しか飲まんからな。」

重造はこの様に実際に会い、自分に関わつた全ての人間を覚えてい るのだ。

永久子は改めて重造のその頭の良さときれのある考え方と舌を巻いた。

この男がいるからこそ、富田家は莫大な資金を欲しままに贅に浸つていられるのだ。

この男はすごい才をもつてゐる……だが、永久子に一瞬不安が過ぎる。

逆に、もじこの男がいなくなれば富田の家はどうなるのだろう……。

「どうしゃつた？ 永久子さん。 もうそろそろ駅につくぞ。」

「……いいえ、何でもありませんわ御義父様。」

永久子ははつと我に返り、急いで重造にしつかりと作り笑いをして見せた。

重造は簡単に騙されてくれたらしく、満足気に永久子を見て下車した。

重造に続く初五郎の三歩後ろに下がりしずしずと後をついていく。

こつ言つ時男尊女卑とか言つ馬鹿馬鹿しい撻が役に立つと永久子は自分を嘲笑つた。

取り合えず部屋に案内されるまでは初五郎の顔を見ずに済むからだ。ほんの僅かな時間ではあるのだがその時間さえ永久子は初五郎と顔をあわせたくなかつた。

駅の傍にあるその宿にはすぐに着いた。

質素だが、昔からの貫禄が深く染み付いていて中々重厚な佇まいだ。一見古めかしく沈んだ焦げ茶色の建物で決して大きくはないのだが、その作りは中々のものだった。

ふと、その入り口を見てみると女性が一人立つていた。

「お待ちしておりました。重造様。初五郎様。……それに永久子様。」

四十を過ぎたかどうかの少々瘦せ氣味のその女性は透き通る白い顔でにつこりと微笑んだ。

黒い髪にはまだ艶があり宿の女将らしく、あつちじと髪を上に結い

上げている。

白と薄い桃色の交じり合つた明るい色の着物には珊瑚の珠がさりげなく裾についていた。

若い娘に似合いそうなその着物を自然に着こなすその姿を見て、永久子は自分もその着物が欲しくなつた。

「おお、さく。久しふりじや。どうじや、初五郎の嫁さんは美しかろ?」

重造はにこにこと永久子を紹介した。

「良く名前ぞ知つとつたな。色綺麗、顔綺麗の言つ事なじじやる。俺はこんな美しい人は今迄見た事がねえ。」

「ええ。私もですわ。かの有名な佐原家の永久子様がこんなに美しい方だつたなんて。初五郎様も素敵な方に嫁いでいらしもうつた事。馴染みでな。よう知つとるけ、気軽に何でも聞いたらええ。」

「初めまして永久子様。菅野桜と申します。宿「朱雀」を仕切つております。何なりとお申し付けくださいね。」

人の良さそうな顔で桜はにっこり永久子にお辞儀した。

「元にある黒子ほくろがほんのり色氣を出していてとても美しかった。からどうぞよろしくお願ひします。」

「富田永久子です。まだ、富田に嫁いで日の浅い人間ですが、これからどうぞよろしくお願ひします。」

そつ言つて、永久子は深くお辞儀を返した。

初五郎はと言つと、少しお辞儀をして後は我関せずさつと宿の奥に入つてしまつた。

お互ひの紹介も済み、永久子達は宿の置くにある広間へと通された。通された広間は特別広いわけではなかつたが薄い金と銀の細かい線の入つた美しい壁には幾つもの高価な絵画が飾られ所々に置かれた足が細く丸い形をしたテーブルには大きくゆつたりとしたワイングラスが人数分置かれていた。

こんな田舎な場所で良くここまで洒落た空間を用意出来たものだ、と永久子は感心した。

これも桜が用意したものだらうか？

座敷でなく椅子も用意されていない所を見るとビックり今日の催しは立ち通しの様だ。

昨夜散々初五郎にいたぶられた永久子には少々きつこいものがある。「おお、おお、豪勢じやなあか。良くここまで飾りつかつけおつたものね。」

重造は入るなり満足した様子でそつと言つた。

「だがちいとばかしあれだな。俺は体が重いから。あまりなじよ時間立つているんはしんどい。椅子はないんか？」

さつきこの店に来てからまだ少ししか経つていないとそつとのに重造はもう疲れたらしい。

確かに栄養を蓄えた過ぎたその体では疲れやすいのも無理はないが、それにしてもあまりに早いと永久子は驚きとおかしさで顔が歪んだ。

「あらあらめんなさいね、わたくししたら。重造様は疲れやすいんでし

たものね。申し訳ありません。」

そう言つと、桜はすぐにいくつか椅子を持つてこさせた。持つてくるなり、重造はすぐに椅子にどかっと座り込み息をつきながら扇ではたはたと自分の顔を扇いだ。

「やあ、もう来ていたんですかおじさん。初五郎も。」

後ろからそう声が聞こえたので振り替えるとすらりと紺の背広を着こなした男性が立っていた。

鼻の下に少し生やした髭は小綺麗に整えられ左右対称にぴんと伸びている。

少しだけ白髪の入った髪の毛はきつちりと七二に分けられていた。身なりを見ただけでは染めないその髪が初老の様な雰囲気をかもしだしているが肌の艶や顔立ちを見れば恐らく永久子より少し年上と言つた所だろう。

「やあ、この方が君の奥さんかい？かの有名な佐原家の。初めまして。野本八夜と言います。今は学者をしていますが、学生時代は初五郎の先輩だったんですよ。」

すらすらと自己紹介してきたその男こそが今日永久子が密かに会うのを楽しみにしていた野本八夜だった。

「初めてまして。富田永久子です。主人がお世話になりまして・・・」

何が主人だと心の中で悪態をつきながら永久子は澄ましてお辞儀をした。

「とても美しい方でびっくりしました。初五郎は本当に良い方に嫁

いでもらつたものだ。感謝しなければね。」

そう言うと八夜は初五郎の方を向き相槌を求めた。  
初五郎はふん、と鼻息でその求めを拵つた。

「はは、相変わらず無愛想だね君は。全然変わつてない。貴方も苦勞なされてるんじゃありませんか？あれじゃあ会話が持たないでしょう？」

「いえ、主人はとても真面目に毎日働いてありますから。とても良い夫ですの。」

吐き気がした。

永久子は猫を被つたり「まかす能力には長けているが嘘をつく」と自体あまり好きではない。

ましてこんな白々しい嘘をついたのは初めてだ。

初五郎の反応を見るのが恐い永久子は急いで話を切り替えた。

「わたくし、野本さんの本を愛読しましたの。とっても素晴らしい本でしたわ。

あまり、理学に触れたことはないんですけど、そんな私でもとても読みやすくて。そう、この前出版なされた本、確かあれば・・・」

「ああ、遺伝学について書いたあの本ですね。驚いたな。女性の方があの本を読みやすいなんて。とても頭の良い方と見える。この前東京でその本の内容について学会で講義してきましたが、ついてこられたのは半分くらいでしたかね。」

永久子の想像以上に野本八夜という男は堂々とした立派な人間だつた。

きっと有名な学会で幾つも発表して慣れっこになつてゐるのだろう。自分の意見、主張を綺麗にまとめて次々に発してくる。

「生物学・・・でしたかしら、確かに少し難しい所はありましたけれど、とても面白くて私すぐに詠み終わつてしましました。」

学の心に火がついた永久子は饒舌になり八夜に負けない位話した。気がつけば、招待された客が少しずつ集まり、「あれが八夜だ」「あれが噂の佐原家の・・・」とひそひそ自分達の話題に花を咲かせている事に永久子は気付いた。

その渦の中で学の交換をしている自分に永久子は久しぶりに胸の熱くなる思いがした。

八夜も熱が入つてきたのか、遺伝学について本に載つてない事まで話を切り出してきた。

「メンデルと言う方を本で紹介しましたね？私はその人に強い尊敬の念を抱いていましてね。何と言つても見つけた法則が素晴らしい。初めて彼を知つた時には衝撃が走りましたよ。彼こそが遺伝学の祖だ。唯一つ彼の偉大な功績を彼自身が知らずに一生を終えた事だけ無念ですよ。」

「メンデル・・・本の中にたくさん出てきましたわね。とても素晴らしい方ですって。」

「ええ、そうなんです。本の中では論点がずれるのであまり詳しくは書きませんでしたが、彼は・・・」

永久子は真剣に話す八夜の目をまっすぐに見つめた。

もう既に何人もの人に囲まれているのにも関わらず、それに一切気付かないくらい自分の研究を一生懸命説明しようとする八夜に永久

子は久しぶりに男の熱を見たのだ。

野本八夜・・・この人は・・・

「八夜さん、貴方また周りが見えなくなつてらつしゃるのね? しょ  
うのない方! 自分の周りにどれだけ人が集まつてらつしゃるかよく  
見てみなさいな。ご婦人まで付き合せて。」

二人の間に入つてきたのは、永久子と同じくらいの年の女性であつた。  
美しくはないが整つた顔立ちできりつとした眉毛が、我の強さを表し  
てる。  
この時代にこれだけはつきり夫をたしなめる妻がいたのに、永久子は  
驚いた。

ただ、細い目をしたその女性は、育ちが上流でないのか着物を着て  
いるにも関わらず大きな歩幅でずかずかと二人の間に割つて入つて  
きた。

「貴方の悪い所はそこなんだわ。学問になると何も見えなくなると  
こ! 本当にあきれてしまつたら。」

永久子は察した。この女性は・・・

「すまない静枝。<sup>じすえ</sup> また悪い癖が出た。あー、永久子さん、失礼。妻  
の静枝です。」

そう言つて八夜はけじめ悪そうにその女性に手を向けて紹介してき  
た。

紹介された女は永久子の表の顔とは全く逆に、<sup>はつらつ</sup> 滅刺と自信のある態  
度で永久子の方にその細い目を向けて挨拶をした。

「初めてまして。野本八夜の妻の静枝です。八夜の話に付き合つてい

ただいてありがとうございました。」

静枝が持つお転婆で天真爛漫な小娘といった雰囲気は永久子が時々  
欲する人格そのものだった。

## 第十七章 「八夜」（後書き）

中々文が繋がらなくてこのままだと短いなあと一生懸命話を練つて  
いたら過去最高ぐらい字数が多くなつてしましました（汗）  
八夜はイメージ的には若い夏目漱石みたいな感じですかね。  
あんまりイメージつけちゃいけないのかな??

後どうでも良いけど作者は旧千円札のデザインの方が好きでした。  
(本並びでも良い)。

## 第十八章 「静枝」（前書き）

八夜の妻・静枝に会つた永久子は静枝に対してある感情を抱き・・・

## 第十八章 「静枝」

二、三十人しかいない広間に甲高い声が響く。

永久子はその声の主をちらりと見る。

そこには大きな声でけらけらと笑う静枝がいた。

野本静枝。

何故彼女はこれほどまでに堂々と振る舞えるのだろう。

永久子も堂々としているが、艶やかに美しく、それでいて控え目でおしとやかな態度だ。

しかし、静枝の場合は違つ。

まるで少年のように身軽ではきはきとした快活な態度である。

肌の色も日に焼けていて黒く、決して美人ではない。瘦せすぎなくらい細く、その細い顔に更に細い目がついている。着物もこれとて名の知れた高そうなものではない事から身なりへの執着がない事が伺える。

人も集まりそろそろ盛り上がりを見せた頃、永久子は新しく訪れる客に軽く会釈をしながらそんな事ばかりを考えていた。

野本静枝は・・・私の苦手な人間かも知れない。

まだ挨拶だけでろくに言葉も交わしていないが、永久子はそう思つていた。

そう、言つてしまえば好かないのだ。

あの堂々とした態度も、はつらつとして何の悩みも持つていなさそうなあの顔も何故か気に食わない。

「嫌だわあ。だから、言つたじやありませんか。私の方が正しいって。」

そう言つて静枝はぽんと重造の肩を叩く。

「おじさまは知らなすぎますわよ。世間は今めまぐるしく変わつているんだから。」

こんなに馴れ馴れしく有名大会社の社長に話しかける事のできる女はきっと静枝くらいだろう。

「おれあ、今んこと何もわからんねえからなあ。いんや、静枝にはかなわん！降参じや！」

程よく酒が入り顔を真つ赤にしながらげらげら笑う重造の口元で金歯が何本も眩しく光る。

二人はまるで親子の様に楽しそうに話を広げている。

その二人の周りを囲むようにして人が少しづつ集まつていた。

それを何事もないような顔で見つめる永久子の顔は冷静そのものだ。

永久子は本来芯のある女だ。

自分の考えが正しいと思えば、相手を負かすまでその口で正論を述べる。

決して今の時代の女人の様に、男に死ぬまで付き従う従順な性格ではない。

だが、富田家に嫁ぎ、その凛々しい性格は奥深く身を潜めてしまつた。

初五郎に組み敷かれ、家の重圧に潰されいつしか永久子は見た目通りのただ大人しそうな美しいだけの何も知らない奥様となつていたのだ。

それに気付かず、気付こうともせず暮らしていた永久子の田の前に今その全てを突き付けるように静枝がいる。

その静枝の姿の何と輝かしい事だらう。特に何が秀でているわけでもないのにこの煌めきは一体どこから産まれてくるのか。もし、富田家に嫁がなければこつはならなかつたのだろうか？いや、佐原の家に生まれなければこんな事にはならなかつたかもしない。

昔のように、あの幼い自分のままでいられたならどんなに楽しく暮らせただらう・・・

私もあるはるはずだつたなど今思つても仕方のない事だとわかつていても頭の中を回る悲しみの渦は消え去らない。地位も名誉も美しさも全て自分は持つてゐるはずだが、その全てが外側にあるものでしかない。

自分の内側はどうだらう。この白く美しく光る皮を剥けば、どうぞると流れる血と肉の向ひにあるのはきっと暗く空虚なものだらう。

それがわかつてしまつた自分の何と悲しい事か。何と空しい事か。静枝の内側にあるものは何なのだろう？内から出でてくるあの本当の笑顔を作つてゐるものは何なのだろう？

永久子は激しい嫉妬に、妬みにそして悲しみに包まれた。自分の全てが間違つて生まれてきたのだと、育つてしまつたのだと思つと急に涙が湧きそうになつた。

「永久子さん？」

そう言つてそつと背中に触れた相手は八夜だった。

「御気分でもお悪いですか？さつきからずっと遠くを見ていますね。」

八夜は永久子にそつと水の入ったグラスを差し出した。

「いいえ、気になさらないで・・・酔つてるわけではありませんの。」

永久子はそう言いながら八夜の差し出したグラスの水を断つた。

「でも、具合が悪そうだ。貴方そんなに顔も青白いじゃありませんか。少し休まれた方が良い。」

八夜は最初に話をした時よりも何倍も優しい声でそう言った。

「心配していただいて有難うございます。でも<sup>わたくし</sup>私も元々この様な顔色ですわ。あまり体も丈夫ではありませんから。でも気にしないで下さいね。いつもこうですか？」

そう言って永久子はふふっと笑つた。もちろん作り笑いだ。その顔を見て八夜はやや深刻そうな顔をした後急に永久子の手を掴み、部屋の端の椅子へと連れて行つた。その手は熱く、強引で何故か永久子の胸は一つ高鳴つた。

「八夜さん？どうなさいたの？」

驚いた永久子は思わず八夜に話し掛ける。

「どうぞ座つて下さい。やはり貴方は無理していらっしゃる。元々体が弱いなら尚更休まれた方が良い。」

そう言つてハ夜は永久子を椅子へと座らせた。

やや強引に座られた永久子は驚きながらハ夜の顔を見上げる。

その瞬間心配そうな顔で此方を見下ろすハ夜と目が合つた。

「・・・有難うござります。」

間の抜けたような声で永久子は感謝の言葉を口にした。

ハ夜は永久子を見たままその視線をそらさない。

ハ夜は消えそうな位小さな声で一言ある言葉を口にしたのを永久子は聞き逃さなかつた。

「・・・美しい。」

永久子の胸の高鳴りは一つ一つと増えていく。

その高鳴りは速まり止む事を知らない。

永久子とハ夜はずつとお互いを見つめ続けていた。

## 第十八章 「静枝」（後書き）

また更新が遅れてしまい大変申し訳ありません。  
もう飽きてしまった読者の方もいらっしゃるかもしれません

学生の身なので試験に追われてる間は更新もかなり滞ってしまう事  
ご理解頂けたら嬉しいです。（何でみんなに試験が多いんだろう・  
今年までに後一話くらい更新できたらと思っています。

来年はもう少しテンポ良く更新できるよう頑張ります。  
見てくださってる読者の方々に感謝です。

本当に有難うござります。

そして、悠久子と誰かさんが意外な展開になつてますね 他人事。

## 第十九章 「回想」（前書き）

互いに見詰め合う八夜と永久子。  
それを見た静枝は

一番最初の夫はどんな名前だつただろうか・・・

もうそれさえも忘れてしまつた。

まだ、何年と昔の事でもないのには興味がなくなるとこれほどまでに綺麗さっぱり思い出せなくなるものなのだろうか？

父親に無理矢理会わされた初めての結婚相手は全てに興味の失せた男だつた。

永久子の美しさも人格も全てがその視界に入らずただ1日中ぼんやり窓の外を眺めているだけの日々をずっと送つていた事だけが記憶に残る。

お互いくるくに会話もせず一日が過ぎていく。そんな事も珍しくはなかつた。

そこそこ名の知れた裕福な家の次男坊だつたが、生まれつきお頭に病が巣くっているらしく自分の世界に籠りきりの夫だつた。

夫が家にいると話つのに妻が外で遊ぶわけにもいかず、家でやる家事と言えば一人分の食事と洗濯くらいだつた。

気付けばどちらが言い出したか離縁となつていた。

家に戻つてきた事を父に激しく叱咤され、鬱々と落ち込でいた永久子の前に現れたのが一番目の夫だつた。

その夫の優しさに、凛々しさに永久子は恋に落ちすぐに結ばれた。永久子は初めての恋の甘さに、情事の快樂に触れ夢中になつていた。そのすぐ後に奈落のそこに突き落とされるとも知らずに。

そして今の夫初五郎との生活は・・・絶望と隣り合わせだ。

「・・・さん、永久子さん？」

永久子ははつと我に返り呼ばれた方を見上げた。

「やはりかなり具合が悪そうだ。医者を呼ばれた方がいいかもしない。」

そこには心配そうな顔で此方を見るハ夜が立っていた。  
どれくらいの時間ぼうっと過ごしていたのだろう。  
そして何故過去に還つていたのだろう？

「いいえ、大丈夫ですわ。ちょっと氣を取られていて・・・医者など結構ですか？」

「そうですか。だが、少し休まれた方がいい。菅野さんに部屋を用意させましょうか？」

ハ夜はまたグラスの水を差し出しそう言った。

永久子は感謝の言葉を述べ、今度はグラスを手に取った。  
そう・・・今まで私の上を通つた男達・・・私を幸せにする事ができなかつた男達。

私が幸せいきなかつた男達。その過去を思い出した。

ハ夜はきっと相手にしてはいけない男なのだ。

妻もいるし、富田家との関わりも深い。胸を高鳴らせてはいけない相手なのだ。

きっとその事を分からせるために、過去の回想が起こつたに違ひない。

いけない。また、この様な淡い感情に惑わされてはいけない。

「いいえ、本当に大丈夫ですの。」

グラスの水を受け取った永久子は、その水を一口口に含む。それを見ながらハ夜がふと言葉を発した。

「影に咲く 百合の花の香 香る時 散りに耐えて 鬱々と」

永久子はびっくりしてグラスを落しそうになつた。

「まあ・・・ハ夜さん・・・詩をお詠みになるの?」

「少し嗜んで<sup>たしな</sup>いるだけですよ。普段は学者ですからね。」

永久子は急に嬉しさで舞い上がる様な気持ちになつた。自分と同じ様に詩を詠む人間など富田家の屋敷にはいなかつたからだ。

「私も・・・私も詩を詠みますの。」

「ええ、知っていますよ。詩心を見ました。」

「まあ、ご存知でいらっしゃるの?」

永久子はすっかり興奮して少女の様に浮かれた声を出した。

「ええ。良く知っています。ははは・・・」

「・・・? 私、何かおかしい事言つてしまつたかしら?」

「いいえ、失礼。ただ、先程までとても落ちついてらしたのに、詩の事になるとすっかり可愛らしくなってしまわれたから。本当に詩がお好きなんですね。」

「まあ、<sup>わたくし</sup>私<sup>わたし</sup>つたら……」

永久子は顔が紅くなるのを感じた。  
いけない……こんな事で動搖などしては……

「……さつきの言葉、聞こえてしましましたか？」

八夜は少し声を小さくした。八夜の真剣な眼差しが永久子を見つめる。

永久子はまた胸が高鳴るのを感じた。

「……さつき……？」

「はい、私がさつき言つた言葉です。」

永久子は先程八夜が発した言葉を思い出した。

「……美しい」

確かに八夜はそう言つた

永久子に向かつてはつきりと。

どう返せばいいのだろう?八夜はもしかしたら自分の事を……

「まあまあ私がいるといつのに八夜さんたら一離れてくださいな!」

急に割つて入つてきたのは静枝だつた。

「随分と仲がお宜しい事。私が話し込んでる間にとても仲良くなれたようね。」

静枝は機嫌をひどく損なつた様で皮肉たつぱりに八夜を睨みつけた。思つてゐ事を隠そともしない所を見ると静枝は本当に裏表のない性格らしい。

「違うんだ静枝。永久子さんは氣分を悪くされていてね。丁度今、少し休んだ方がいいんじゃないかと話していた所なんだよ。それより君の方こそ失礼じやないか。永久子さんは富田の家の方だよ。それなのに少し挨拶しただけでどこかへ消えてしまつて。」

「あら・・・そうね。うつかりしてたわ。『ごめんなさいね。』

静枝は本当に忘れていた様にすつとんきょうな声で返事をした。

「ごめんなさいね永久子さん。私つてこいつ、性格なの。何時も周りが見えてないつて夫に怒られるのよ。昔から直そうとはしているんだけれど。」

静枝は叱られた子供そつくりにべろりと舌を出した。永久子は何だか急に静枝の事を親しく感じられた。もしかしたら静枝は裏表がない分他の女人よりも楽な付き合いが出来るかもしねれない。

「いいえ、私の方こそ先程はろくな挨拶も出来なくて失礼致しました。」

永久子が丁寧な返事すると静枝はまたけらけらと笑い出し、永久

子の肩を軽くぽんつと叩いた。

「嫌だわあ、永久子さんたら！私達同じ年でしょ？もつと崩しましょつよ。私の事は静枝で良いから。ね？」

先程までひどく静枝を警戒していたのに永久子はふと安心する自分に気付く。

「ええ、よろしくね。静枝さん。」

「うふふ。ねえ、それより私貴方に聞きたいことがあるのよ。永久子さん詩心に詩を載せてらつしゃるでしょつ~」

静枝は興味津々と言つた感じで永久子の顔を覗き込んできた。

「ええ、ほんの少しだけですけれど載せて頂いてますわ。先程八夜さんにも聞かれました。」

「まあ！まあまあ！私いつも詩心を愛読しますのよ！何度も詩も送つて・・・もちろん載せてもらつた事なんて一度もないですけれど。

何て素晴らしいのかしら・・・羨ましい！」

静枝は心の底から感激しているといった風に元々大きい声を更に荒げた。

「ねえ、良かつたら私とお友達になつて下さらない？ね？私達家も近いし。詩について語りましょつよ。そうだわ！今度一緒に私の家で詩を詠みましょう！永久子さんとは非詩を詠んでみたいわ。何せ詩心に載るくらいですもの。ああ、楽しみだわ！ね！そうしましょ

「うー

うきうきとしながら静枝は永久子の白く細い手をぎゅっと強く握り勢い良く上に掲げた。

今までそんな事をされた事のない永久子はびっくりしながら返事をする。

「ええ。 わたくし 私で良ければいつでもお伺いしますわ。」

「ああ良かつた！ 私本当に楽しみだわ。」

氣付けば先程の気分が落ち、椅子で落ち着いているのがやつとだつた体はしっかりと立ち上がりいつもの様に真っ直ぐと背筋を伸ばしている。

永久子はこちらに来て初めて良い意味で付き合える人間が出来るかもしれないと感じた。

## 第十九章 「回想」（後書き）

きつぎり今年に間に合いました；

本当にきりぎり・・・（汗）

今年は永久子という女性が生まれて、それを自分なりに書く事がで  
きて良い年だつたと思います。

まだまだ下手な文章で読みにくいとは思いますが、努力していくの  
で応援宜しくお願ひします！

今年は大変お世話になりました。  
また来年も宜しくお願ひします。  
皆様良いお年を！

## 第一十章 「訪問」（前書き）

永久子の住む富田家の家にある日突然静枝がやつてきて

## 第一十章 「訪問」

夏の暑さが盛りを終える。

今年はいくらか乾いている方だったが、今日はその夏の残りか特に蒸す。

梅が汗を拭きながら永久子の食事の片づけをしていると、玄関で人が呼ぶのが聞こえた。

「「めんくださいな。永久子さんいらっしゃるー？」

高く大きな声で叫んだ女は静枝だった。

「あー、まあまあよつけしゃれー？」

慌てて迎えに出た梅は突然の静枝の訪問に軽く会釈をした。

「あらあ、梅さんじやあないの。こんにつけーお久し振りねえ。お元気だつたかしら？」

静枝の声は更に甲高くなる。

きんきん声で挨拶した後静枝はどうと玄関に腰を下ろした。

「お久し振りで「やいあす。」つちやはまあまあです。静枝様も相変わらずお転婆な様で。」

梅がくすつと含み笑つた。

「いやあだ、梅さんたらー私これでもおじとやかになつた方よ?毎日注意ばかりされてるけれど。」

「はへへ。どじがでしょ。」  
「え？」

冗談を言つ梅の肩を静枝がぽんと叩く。

「もへへ。相変わらず梅さんは私を子供みたいに扱うんだから。私も  
お一十八よ。うふふ。それにね。私今日は永久子さんに会いにきた  
のよ。いらっしゃるかしら？」

「奥様に？奥様なら今丁度お食事御済みになつたとこであります。少々  
お待ち下しあ。」

梅はぱたぱたと永久子を迎えて行つた。

「・・・秋月の・・・ふふ、これじゃあ可笑しいわね。何時頃書か  
れたのかしら？まだ夏を過ぎてもいいのに。」

永久子はその美しく細い指で一枚の手紙をなぞつた。  
腹も満腹になり、心地よいまどろみの中で永久子は伏し目がちにそ  
の紙を机の上に置いた。

「失礼しあす。」

「どうぞ。入つて頂戴。」

梅の声を聞き永久子はすぐに振り向く。

「失礼しあす。お邪魔しあしたか？」

「いいえ、丁度今手紙を片していったところよ。ほら、見て頂戴この手紙の数。全て詩心を読んだ方からの私への手紙よ。すごいでしょう？いつの間にかこんなに増えてしまつたの。」

永久子は両手で抱えきれないくらいの手紙を持つて梅に見せた。

「中には自分で詠んだ詩を私に送つてくる人もいるわ。でも見て頂戴。今日届いたものよ。秋月の夜を詠んでるんですつて。どうして送つてきたのかしらね？まだ秋の月を詠むには早すぎるのに。ふふ・・・」

永久子は詩心の話ができると機嫌だ。

「はあ。私は詩の事はよくわからなあですが。何でこんな暑い日に送つてきたんでしょうかねえ？」

「ふふ、そうでしょう？・・・それで、梅。何か用事かしら？」

「ああ、すいあせん。すっかり忘れてました。実は今玄関の方に静枝さんが来てらつたるんですよ。」

「静枝さんが？」

永久子は両手に抱えた手紙を何通か畳に落としてしまつた。

野本静枝・・・本当に来たのだ。

それにしても急な話だ。あの時会つてからまだそんなに経つていないのに。早速か。

「そう。じゃあ上がつていただいた方が良いわね。早速お出迎えし

なくては。『いつか向ひの部屋にお通じし』。

「わかりあした。」

しかし、じとんにすぐに来るとは静枝は本当に行動的だ。  
そんな事を思いながらひんやりとした廊下を永久子は音もなく歩き  
静枝の方に向かつ。

永久子が玄関に行くとそこには直接床に座り、着物から出でている足  
を暇そうにぶらぶらさせながら待つ静枝がいた。

まるで女中が着る様な赤茶色の地味な着物を着ている。帯も黄土色  
を暗くしたような四通柄で、ただ線が入つていてだけだ。

何も用事もなくただ家にいるだけの自分でさえ淡い藤色の無地の着  
物に百合のお太鼓柄の帯を締めているところに静枝は一体何時の  
時代の女なのだろう。それとも地方の女人は皆この程度なのだろう  
か。

「じんにちは、静枝さん。」

急に呼ばれてびっくりしたのか静枝は飛び上がりながら後ろを振り  
返つた。

「あらあ！永久子さん！ようやく会えたわねえ。梅さんが遅いから  
待つちゃつたわあ。」

細い目がにこりと笑つたのでまるで線の様だ。

「こんなにちは静枝さん。お出迎えが遅くなつてしまつて」めんない  
いね。そんな所で待たせてしまつて。  
どうぞあがつて下さいな。」

永久子は申し訳ないと静枝にお辞儀をした。

「ああ、良じのよわやわや。そんな事より今から私の家に来ません？お茶もお菓子も用意するわ。ね？今から私の家で詩でも読みますよ。」

「今から？」

永久子はあまりの急な誘いに驚いた。

「やつ、今からよ。駄目かしら？」

「駄目ではないけれど・・・随分急な話なのね。」

「『じめんなさいね。私思い立つたひすぐに動いたやつ』の。じゃあ行きましょうか。」

静枝は永久子がはつきり返事をしない内にやつと腰をあげ外に出ていつてしまつた。

「すいあせん。静枝さんは昔からああ落ち着きがないもので。治せつち周りからいつも言われてるんですけど。」

梅は苦笑いを浮かべながら言つた。

「仲が良いのね静枝さんと。良く知つててるの？」

「ええまあ。でも最近は用事がある時に少し話すだけです。静枝さんは野本家に嫁ぐ前からうちと繋がつてましてねえ。ちいちい頃から重様に娘の様によつ可愛がられとりやした。私も暇があれば

「ままで」との相手させられましたなあ。ただ、初五郎様と仲が悪くて。だから家の方にや寄りつかないんですよ。」

そうなのか。永久子は静枝と梅の親しい理由を知つて納得した。

「静枝さんとこ行きなさるんですか？御支度した方がよろしいですか？」

「ええ、そうね。せつかく誘つて頂いたしお邪魔してきます。向こうの家に何か持つていきたいから準備して頂戴。静枝さんが待つてらっしゃるから早くお願ひよ。」

「かしこまりやした。」

永久子は簡単には身支度を済ませ外に出た。そこには静枝が大きな欠伸をしながら氣だるそうに立つっていた。

「待ちくたびれちゃつたわ永久子さん。」

今の大股のせいでもうるんだ目を擦りながら静枝は言った。

「じめんなさいね。支度してたものだから。」

静枝が大股でずんずん進むので、永久子は少し小走りになりながら返事を返す。

永久子が追い付くと静枝は手を後ろに組みながらくぐりと横を向き、永久子の顔を覗き込む様に見た。その仕草はまるで女学生の様だ。

「私の家つてここからとつても近いのよ。すぐ着くの。今日は八夜

さんも家にいるはずだからちょっとお邪魔かもね。でもそうだわ、八夜さんも詩に興味があるみたいだから三人で一緒に遊びましょうか？」

下駄の音をからからと大きく立てながら静枝はますます目を細くしながら笑った。

同じ町に住む同じ年の女。

これ程までに自由奔放に暮らしている静枝が永久子には別の世界の人間の様に思えた。

## 第一十章 「訪問」（後書き）

ようやく試験が終わったのでまた少しずつ更新しようと思こまく。  
よろしくお願いします。

## 第一十一章 「企み」（前書き）

静枝の家に招待された永久子。  
そこには静枝の夫である八夜もいて

## 第一十一章 「企み」

「さあどうぞ、ここが私の家の。」

永久子の住む家から本当に少し行った所が静枝の家だった。  
一見質素に見えるがちゃんと年月を重ねた佇まいと風格を持つ昔ながらの家屋といった感じだ。

瓦が何枚もしかれた屋根にはびっしりと苔が生え、その屋根を支えるしつかりとした柱はかなり太く、丁寧に作られているのが窺える。  
八夜の父の幹成みきなりの代からの家なのだろう。

この家の持つ重厚な雰囲気はまだ建てられてから田が浅い富田の家にはないものだ。

富田の家にはさすがに及ばないものの、敷地の広さも大きめの母屋の他に何軒かの家が連なっていて、かなりの広さと見える。  
遠くに見える庭では池の鯉に餌をやる女中の姿が見えた。  
こんなに広い家がこんなに近くにあつたのか。

永久子が外に出る時の用事と言えば、初五郎の妻として出席する会食や重造の会社の繫がりで出なければならない行事が大半を占めていたため、永久子はほとんどこの町を散策した事がなかつた。  
特に静枝の家の辺りは一度も出掛けたことがない。

永久子は自分は本当に富田家と言つ籠の中に籠りつきりだったのだと思つた。

「さあさあ遠慮せずどうぞ上がって頂戴。今お茶の支度をさせるわ。」

「

静枝は下駄を無造作に脱ぎ捨て、出迎えた女中にお茶を用意するよう命じた。

「履物はここによろしいかしら？」

永久子は静枝が脱ぎ散らかした分も一緒に片付けながら静枝に聞いた。

「あらー、めんなさい私ったら。ええ、そこで大丈夫よ。ありがとうございます。ひ、どうぞ。」

静枝は申し訳なさそうに頭を搔きながらすかずかと廊下を進んでいく。

静枝は子供の様に落ち着きがなく、お転婆な上にどうやらあまり起こってる物事に大して気を止めることができないらしい。

「待ちなさい、静枝！ 一体君は何なんだ、そんな事をさせで。お客様に脱いだものを片付けさせるなんて失礼にも程があるじやないか。」

少し怒った口調で静枝を叱咤した声の主は八夜だった。

「よりもよつて永久子さんにそんな事をさせるなんてどういうつもりなんだい？ それにそんな着物で富田の家に行つたなんて・・・ああ、もう君は本当に手が掛かるな。」

八夜はふうっと溜息をつき、半ば厭きれながら静枝を窘めた。  
怒られた静枝は子供の様に、ばつが悪そうにごめんなさいと謝った。

「すいません永久子さん、うちの静枝は本当に礼儀というか、行儀が悪いんです。昔から直せと叱っているんですが・・・どうぞ、こちらに。本当に失礼しました。」

「いいえ、どうぞ氣になさらないで。とても賑やかなお家なんですね。羨ましいですね。」

その言葉は永久子の本心だつた。  
お互い氣を遣わずに言い合つてゐるこの二人の関係は理想の夫婦そのものだ。

これだけの地位の高い男性であつても、こんなにも屈託のない夫でいられるのだ。

永久子は改めてあの家に巣くう重苦しい空気が初五郎によつて作り出されているものなのだと感じた。

「静枝の急な誘いに付き合つて預いて本当に感謝しています。古くて何もない家ですがどうぞゆっくりしていって下さい。」

八夜はそう言うと永久子を客間に案内した。  
今日の八夜の服装はこないだあつた時とは違い、白いシャツに灰色のズボンを履いている。

この暑さのためか胸元のボタンを開けて前をはだけさせている。八夜が歩きながら腕まくりをする。  
捲つたシャツから伸びる腕は意外に逞しく、暑さのせいでやや汗ばんでいた。

「いらっしゃいません、こんな急にお邪魔してしまって・・・何かお仕事をされてらしたんでしょう?」

永久子は八夜の背中に向かつてそつと語った。

「いえ、ちょっと書棚の整理をね。家ではいつもそうです。ずっと書斎に籠りつきりだ。学会で発表する」と増えていく資料に手が

追い付かない状態ですよ。」

ははつと笑いながら頭を搔く八夜の手を永久子はじつと見つめた。学者にしては細くないその身体を長く見つめる自分に気付いた永久子は赤らめた頬を俯いて隠した。

「さ、どうぞ。今お茶を煎れさせていますから。全く、静枝はどこにいたんだろ？ いつもああで本当に困っているんですよ。永久子さんの様な妻だつたら安心して家を任せられるんですがね。」

髭に隠れた口元がふふっと笑つたのを永久子は見た。八夜の髪がもつと黒くて、髭を剃つたならきっと永久子と同い年くらいの顔になるだろ？

そのくらい八夜の顔の笑つた顔は幼く見えた。

「いいえ、わたくし私なんてただ嫁いだだけで何の役にも・・・いつも詩を詠んでいるだけですもの。周りから見たら使えぬ嫁に見えるでしょうね。」

「そんな事ありませんよ。あなたは美しい。それだけでも素晴らしい事なのにあの詩心に詩を載せているなんなんてすごい才能ですよ。静枝にも見習つてほしいものだ。・・・私もそんな妻が欲しかったんですけどね。」

最後にぼそつと言つた八夜の一言に永久子は顔を上げた。その瞬間永久子の方を見つめる八夜と田が合つた。この男はどういう考え方なのだろう。

永久子の頭の中にはまだこの前の一言が響いていた。

一人きりでいた時に八夜が言つた言葉。

「あなたは美しい。」

あれは、冗談でもお世辞でもなかつた。そんな口調ではなかつた。まるで氣のある相手に告白でもしているかのような甘い言葉……だが、氣のせいかもしないとも思つた。

あの後静枝が横から入つてきてから八夜は何事もない振りをしていたし、あの後何度も二人で話したが全くその様な雰囲気にならなかつたからだ。

もしかしたら八夜もまた永久子の発する美しさに触れて惑わされた一人なのかもしない。

永久子はそう思いあの日の出来事をなかつた事とした。しかし、今八夜の話す口調はあの時永久子の胸を高鳴らせた口調そのものだ。

この男はどうしてまたこの様な氣のある素振りを見せるのだろう。

いけない

永久子は懸命に八夜の言葉の本心を探ろうとする自分を止める。八夜はいけない。八夜は近すぎる。初五郎だけでなく重造とも繋がつていて。

まして、自分はもうこの男の妻と友人となつてしまつたのだ。このままこの誘いに乗れば確實に煩わしいものとなる。

この男は駄目なのだ。

前にも自分に言い聞かせたはずなのに込み上げてくる色めきの感情を永久子は必死に抑えた。

もう色恋などくだらないものに惑わされてはいけない。

このまま枯れた人生を送り朽ち果てようとも、甘い蜜の先に暗闇が待つのならばこれ以上自分の心を傷つけるような愚かな事はしてはいけないのだ。

永久子は動搖した自分の心を押し戻し、またいつも仮面を被り八夜に答えた。

「八夜さんたら学者様なのに冗談も仰るのね。きっと私を妻になんかしたら毎日詩を詠むのに付き合わされて飽き飽きしてしまわ。」

永久子は悪戯っぽく、だが一線を引くように答えた。

その永久子の返事に八夜はすぐに返事をする。

「つれないですね。」

その返事は意外な程あつさりとしていた。

永久子の胸の奥がちくんと痛む。

その後のやり取りは何気ない普通の会話だった。

暫くすると静枝が詩心や筆や紙を持つてやってきた。

「ねーえ、永久子さん。これから一緒に詩を詠みましょうよ。何か同じ題で考えながら。何なら八夜さんもどうぞ。部屋の整理なんかやめちゃって入つていいわよ。ね、永久子さん。いいでしょ?」

静枝は子供が親に甘えるような口調で永久子にそう頼む。

「面白そうだな。僕も上手くはないけれど是非一緒にやってみたいね。何といっても詩心に載る方と一緒に詩を詠めるのだから。」

「ええ、喜んでお願ひしますわ。」

それから三人で詩を詠み、題を変えながら次々と詠んでいく。

思った通り、静枝はあまり才能がないのか子供の様な詩ばかり詠む。ショッちゅう間違えるし時間がかかるので永久子は姉が妹に教えるような気分で詩を一から手ほどきしなければならなかつた。だが意外なことに、八夜の方はすつきりとした良い詩を詠みあげていく。

ひねりはないが、永久子が少し助言をするだけですらすらと詩を作つていくので永久子は感心した。

「まあ、驚きましたわ。八夜さんは詩もお出来になるのね。とつてもお上手だわ。」

「いえ、見よう見まねですよ。きっと教える師が良いんです。」

そつ言つてまた幼い顔がにこりと笑つた。

「あーあ、駄目だわ。今日は調子が悪いつたらないわ。全然駄目よ。」

そう言つて静枝は筆を投げて椅子に深く座り込み天井を見上げた。その姿は子供としか言い様がない。

「全く君は。いつもすぐ投げ出すんだよ。教えてもらつてのにそんな態度は失礼じやないか。」

そう言つて八夜は次の自分の詩を小声でそつと詠み上げた。

「百合の花 野草近くに 溜息を 漏れる吐息に 我を感ずる」

永久子は心臓が止まりそうになつた。

静枝は今の詩を全く聞いてなかつた様だ。  
暇そうに自分の指をいじつてゐる。

永久子は八夜のほうを向く。

八夜の瞳はじつと永久子を捉えたままだ。

永久子の胸は大きく高鳴つた。

もし永久子の思つた通りの詩ならば  
もし永久子を百合の花に例えたならば

八夜はまたも永久子の心を揺さぶるつとしているのだ。  
自らの妻の目の前で。

永久子は目を伏せながらまた静枝の方を向く。

夫がこんな大胆な詩を詠んでいるのに何と呑気な態度だらう。

永久子はあきれ返つたと同時に先程消した念が再燃していくのを感じた。

こんな女人にこれだけ魅力のある夫がいるのに何故自分は・・・  
自分に多少落ち度があるとしても何故これ程までに違う人生を歩んで  
いるのだろう。

美しさも学も自分なりに磨いてきたはずだ。

常に自分を向上させようという精神も未だ衰えてはいない。

それなのに何故一生を共に過ごすべき伴侶に恵まれないのだろう。  
この女人は子供の様にただ遊んでいただけなのに。

永久子に沸々と邪念が沸く。

先程理性で抑えたはずのものが熱を発し愚かな考えに變る。

永久子は静枝が見てないのを確認し、八夜を見つめて言った。

「素敵な詩だと・・・八夜さん。」

口元に当たた白い指は色っぽく、動くその口元は隠微なものを感じさせた。

この世の男の大半が墮ちてしまいそうなその瞳は八夜を捕らえて吸い込もうともしているかの様だった。

そう、自分の考へてゐる事はこの世の中で決して許されない事だ。だが、愚かと分かっていても止められない欲望が頭を搔き回す。

もし「この女から」この男を奪つたらどうなるのだろう

## 第一十一章 「企み」（後書き）

また更新が遅くなりりますいません。  
休みのはずなのに何故か忙しいです。

何でだらう？

3月後半は家にいないのでそれまでにまた更新したいです。  
そして永久子が何やら企んでいるようです・・・

## 第一十一章 「手紙」（前書き）

静枝に家に行つた日から八夜の事が頭を離れない永久子。  
そこに八夜から手紙が来て—

## 第一十一章 「手紙」

ぼうつと窓の外を眺める。もう秋が来る。それとももう来たのかも  
しない。

そんな事を考えながら永久子は先口の出来事に耽っていた。

そう、八夜の家に行つた時のあの出来事だ。

八夜の家で詩を詠んでいる時永久子は心の底から静枝に対して嫉妬  
をした。

何の苦労もせずただのうのうと駄々をこねて生きている静枝を妬み、  
恨み、羨ましいと思つた。

そして同じ態度をとることが許されず毅然<sup>きぜん</sup>に振舞わねばならない自  
分が心底惨めだった。

何故自分だけ

そう思う事がどれ程愚かであるか分かつていて。

その思いを態度に出せばああ、何て可哀想な自分なのだと不幸に酔  
う薄つぺらな女と同じだ。

だから出せない。出してはいけない。

だが、心の隅に巣食うその哀れな自分は確かに永久子自身である事  
も事実だ。

永久子の心には強く気高き精神と打ちのめされ消え入りそうな位弱  
い感情が複雑に入り混じつっていた。

そして八夜 あの男こそあの日永久子が今までひた隠しにしていた

女の部分を露出させた張本人だ。

あの日永久子は人の妻としてあらざる態度を八夜にとつた。

誘惑する様な態度と言葉で八夜を見つめ八夜の誘いにのつたのだ。

八夜の詳しい意図はわからない。

だが、永久子に何か別の感情を抱いていることは確かだ。

友人の妻以外の感情の何かを・・・

そう思うと八夜はやはり危険な男だ。

自分と永久子の立場を理解しているにもかかわらずあの様な態度を取るのだから。

しかし、永久子からはやつぱりやめよつか？などと怖氣づいた感情は出てこなかつた。

八夜は優秀な男だ。静枝の夫にしておくには惜しすぎる。

八夜を選ぶために具体的に何かをしようとはまだ考えられないが、少しぐらいの憂さは晴らしていいのではないか？

そんな疚しい考えが今永久子の頭の中についた。

普段の自分であれば決してこんな事は考えないだろう。

しかし、長く富田家の重圧に蝕まれた永久子にとつて八夜からの誘惑は暗く重く病みきつた永久子の心を浮き立たせるのに十分だつた。

「永久子さん、今大丈夫ですか？」

梅の声だ。

「ええ、大丈夫よ。どうぞ入つて頂戴。」

秋になり、着物の色を変えたのだろう。

秋のいちょうの葉よりも少し暗めの着物を着ている。

梅は大きい音を立てないように静かに襖を閉め、ある封筒を永久子に見せた。

「失礼しあす。野本八夜様からお手紙あります。」

「まあ、八夜さんか？？」

噂をすれば、とはこの事だ。

茶色い封筒の中には一枚の手紙が入っていた。

「・・・学会のお誘いだわ」

一枚目は、来月開かれる学会の日程などの詳細が書かれた紙だった。一枚目はその学会で自分が発表する事になったので、時間ががあれば是非来て欲しいと書かれていた。

「八夜さんが来月学会で発表なさるんですって。もし良ければ私も  
つて・・・」

「まあ、それはそれは・・・本当に八夜様は勉強熱心な方ですわたくし。  
あね。」

「そうね、そういうばあ。貴方静枝さんと親しかったのなら八夜さんとも顔見知りなのではなくて？」

「いえいえ私は全くそんな立場でなくして。確かに静枝さんは昔から重様になつてらつさつたから私も知つてあります。八夜様と静枝さんの結婚はほんの2年ばかり前の話です。八夜様のお父様の幹成様は重様と仲が良いんで良く知つておりあすがね。昔から八夜様はお忙しい方だつたんでこの家にも一度位しか来てねえと思ひます。なんで、私も八夜様の事はお顔もあんま良くなねえんですよ。」

「ああ、やうなの。」

それは都合が良い、と永久子は思つた。  
この屋敷に八夜は滅多に来ないなら、初五郎と接触する機会も少ないだろう。

「せつかくのお誘いだし行つてみようかしら。難しそうなお話かもしれないけれど色々知つておくのは良い事だから。」

「やうですね。永久子さんは勉強熱心じゃから。」

そうつ言って梅は夕飯の支度に外に出て行つた。

梅が出て行つた部屋で永久子は、梅がいる間ずっと指で隠していた文の一部を見た。

一枚目の紙の一番下に男の人の字らしきはつきりとした字で書かれたほんの一行の文。

そこには詩が書かれていた。

「育つ秋 いちょう葉落ちる かの時に 再び見ゆる 夏の残り香」

永久子は一目でこの詩の意味を理解した。

この手紙は、あの乾いた夏に会つた日からの再会を望む八夜の手紙だつた。

## 第一十一章 「手紙」（後書き）

半年以上も更新を放置していくといませんでした；  
しかもそのわりに話進んでない；；  
前の章のミスもあらかた直したし、ぼちぼちちゃんと更新していく  
うかと思っています。  
よろしくお願ひします！

## 第一二三章 「再会」（前書き）

八夜に招待され、八夜の学会へと出向く永久子だったが

## 第一二三章 「再会」

「それではいつてらつしゃいませ。」

玄関で下駄を履く永久子に瑠璃が薄手のコートを差し出した。

「有難う。気が利くのね。」

「もう秋になりましたから。夜は冷えると思いまして。」

「にこりと可愛らしい笑顔を向けながら瑠璃が言った。

「そうね、今日は遅くなるかもしねから何か羽織つたほうがいいわね。また風邪でもこじらせたら大変だから。」

永久子は以前初五郎に裸のまま置き去りにされ風邪で寝込んだ事を忘れてはいなかつた。その事を少し皮肉つていつてみたがまあ瑠璃にはわからないだろ？

そう思いながら瑠璃の方を向くと何故か少し険しい顔をしてうつ向いている。

「どうかして？ 瑠璃。」

「いいえ、奥様。何も。いつてらつしゃいませ。」

何だらうか？ いつもにこにこ笑つ瑠璃のあの様な顔は初めて見る。何か憂い事でもあるのだろうか？

そう考えながら永久子は駅に向かつた。

今日は八夜の招待で八夜が講演を行う学会に参加する事になつている。

富田家の人間として失礼のないように・・・というのは自分自身本当に聞き飽きた文句なのだが、聞いた話では地方で開かれる学会とはいえかなり大きなものらしく、永久子はいつも以上に気合いを入れて身支度を整えた。

髪も着物もどこを見ても非の打ちどころがない。

白くつややかな肌に赤い口紅が良く映え、大きな目を縁取るまつげは永久子の顔を更に華やかにさせる。

よし、今日も自分は完璧だ。そう言い聞かせて家の外に出た。遠慮がちに小声で挨拶をしてくる近所の婦人に永久子は軽く会釈で挨拶を返す。

びっくりしてまた深々とお辞儀を返す婦人の反応を見て、永久子は今日も自分はちゃんと「貴婦人」を演じられていることに満足と安堵感を覚えた。

そのせいで、先程の瑠璃の事はすっかり頭の中から消え去っていた。

「さあ奥様、どうぞ。」

永久子を馬車へと促した男は喜一だった。

喜一は、永久子が初めてこの家にやつてきた時に駅まで迎えに来た重造の使用人だ。

「ありがと、喜一。」

永久子が感謝の言葉をかけると、喜一は一瞬永久子の顔を見た後驚いて目を大きく開けたまま深々とお辞儀をしながら馬車のドアを開けた。

まだ緑生い茂る季節に会つた時と同じ様に、喜一は鼻の頭にたつぶりと汗をかいていた。

少し厚めの「マー」を着せられて「いるせ」もあるかもしれないが、尋常な量ではない。

深くお辞儀をして「いるせ」で、鼻の頭に溜まつた汗が今にも地面に落ちそうだ。

どうやらまた永久子を前にして緊張してしまつて「いるらし」。

永久子は何だか急に可笑しなつて、お辞儀したままの喜一の肩にそつと手を掛け軽く叩きながら言つた。

「そんなにかしこまらなくともいいのよ、喜一。今日は遅くなります。家の事はお願ひね。」

そう言つて、微笑んだ永久子を見て喜一はその瘦せた顔についてる口をぽかんと開けたままドアを閉めて見送つた。

喜一は見送つてる間もずつと口を開けたままだつた。

会場に着くと、そこには普段では見る事のできない光景が広がつていた。

どこを向いても、男性ばかりだ。

中年の男性ばかりが、わらわらと歩き書類を見たり互いに話し合いながら永久子の乗る馬車の前を通り過ぎていく。

永久子が馬車から降りその光景を見回すと、周りの男性の動きが止まり急に静かになつた。

どうしたのだろう、わざまで監視しておられたのだ。

きょとんとした顔で辺りを見回すと、どうやら全員の視線は永久子に向いてるらしい。

無理もない、これから学を交換し合おうとしたその真ん中に美女が現れたのだ。

その美しさに多くの者が振り返り、永久子を見る人間の目はどこか落ち着きがない。

私を見ている・・・？

永久子は急に恥ずかしくなり、もう一度自分の着物を見直した。ちゃんとこの場にふさわしい格好で自分を飾れているだろうか？

「やあ、永久子さん。来て下さったんですね。」

「八夜さん。」

会場の入り口に着くなり、永久子はすぐに八夜に会えた。

学会用に新調したのか、濃い灰色のスーツを着ている。パリッと糊の利いた白いワイシャツと紺色のネクタイが良く似合っている。ネクタイについている銀色のネクタイピンもセンスが良い。

静枝の選んだものだろうか？それとも自分でつけたのだろうか？確率が低い話だが、一瞬八夜のネクタイを締めて身支度を整える静枝の姿が浮かんで永久子は何故か胸がちくんとした。

「良かつた。来てくれないかと心配しながら待っていたんですよ。」

「まあ、お忙しいのに・・・」

「いいえ、大丈夫ですよ。僕の出番はずつと後ですからね。どうせ最初は退屈なおじい様方の演説から始まるんですから。」

八夜が小声で耳打ちをした。

「まあ、八夜さんたら」

永久子は笑いながら答える。

「ねえ、八夜さん。今日の私おかしくないかしら？さつきから皆さんがこちらを見ている様な気がして・・・どこか変なのかしら？」

「ああ、当然ですよ。こんな男ばかりの会にあなたの様な美人が来て皆目を丸くしてゐるんです。でもこんなに目立つなんて隣にいる僕まで恥ずかしいや。」

頭を搔きながら八夜は照れる様に顔を伏せた。

「そうでしたの。一応気をつけてはきたのだけど・・・私は、場にふさわしくない格好をしているんではなくて？」

「とんでもない！皆（皆）見惚れ（みど）ているんです。貴方が美しいから・・・」

そう言つて八夜は永久子の手を握つた。

「は、八夜さん・・・」

永久子は頬を赤らめた。いくらなんでもこれはまずいのではないか。いくら学会の場で永久子が人妻である事を知らない者ばかりとはいえさすがに八夜が既婚者だと言う事ぐらいは知つていてるだろう。もし八夜の妻が目の前で手を握つてゐる美しく艶やかな永久子ではなく、子供の様にはしゃぎまわり駄々をこねる色黒の静枝と知つてゐる

人間に見られて「るなら」この光景は少しばかりますい。

周りを見てみると案の定こちらを見るたくさんの視線が、八夜に握られている永久子の右手に集中している。

「八夜さん、いけませんわ、周りが・・・」

「周りが何ですって？さあ、これが今日の僕の演技ってやつですよ。まだまだ時間はありますから見てやつて下さー。」

そう言つて永久子の右手にほんと握らせたのは八夜が今日講演する内容が書かれた紙だつた。

永久子が八夜の顔を見上げると、八夜は悪戯っぽい笑みを浮かべて手を離した。

「それでは僕はまた少し挨拶回りをしてきます。またすぐ戻つてくるので会場を見学されては？たまにはこんな男ばかりの光景も面白いと思いますよ。若くないのが残念なところではあるけれど。」

くすくすと子供っぽい笑みを浮かべながら八夜は向こうの部屋へ行つてしまつた。

はめられた・・・永久子は頬の赤みがとれぬまま立ちすくむ。

八夜は永久子をからかつたのだ。

いっぱい食わされたとむくれる永久子は渡された紙を見る振りをしながら顔を隠した。

(何が見学されては？よ、全く冗談が過ぎるわ)

ブツブツと心の中で文句を言いながら永久子はふと紙越しに会場を

見た。

その瞬間会場の端に佇む一人の女に目が行つた。

(私以外に・・・女性が・・・?)

永久子の視線に気付いたのか女はこちらを向いた。

## 第一二三章 「再会」（後書き）

気付いたら前回の更新からだいぶ期間空いてました……すいません；  
書きたい時に書けばいいやーとか思つたらこんなになってしまつ  
て……  
次回はもう少し早く更新できるよう頑張ります……ようじくお願ひ  
します。——

## 第一十四章 「弥栄子」（前書き）

八夜に招待されて学会を訪れた永久子。そこには「弥栄子」という女性がいて、

## 第一十四章 「弥栄子」

男だけ。しかも若い男などほとんどないその場所にその女性は立っていた。

何て色の白い女人だらう。

その女性に対する永久子の第一印象はそうだった。

永久子と同じ位白い肌のその女性は永久子の視線に気付いてこちらを向いた。

かなり小顔でとても可愛らしい顔をしている。おつとりした眉とつぶらな瞳が印象的だ。

年は永久子より下に見える。瑠璃ぐらいだらうか？

背はそれ程小さいわけでもないのにあまりにか細いのでとても嬌くそして幼く見えた。

落ち着いたたずまいから女学生と言つことはないかもしけないがこの場所にはかなり不釣り合いだった。

もしかしたら自分より浮いてるかもしれないと思いながら永久子は軽く会釈をした。

女性も向こうから会釈を仕返す。

「誰かいましたか？」

声のする方を向くと戻ってきた八夜だった。

「いえ、あそこに女性がいらっしゃるから珍しいと思つて。」

「ああ、弥栄子さんじゃないか。」

「「」存知なの？」

「ええ、知り合いなんです。弥栄子さん！」

その女性は八夜の呼ぶ声に気付き今度はすぐに振り返り真っ直ぐにこちらに向かってくる。

永久子の百合の様な魅力とはまた違つて弥栄子と云つ女性は鈴欄の様な可憐な雰囲気を持っていた。

「来ていたんですね、こちらは富田永久子さん。あの富田の家の方ですよ。永久子さん、こちらは相模弥栄子さん。私の友人です。」

「永久子です。初めまして。」

「相模弥栄子です。お初にお目にかかれて光栄ですわ。どうぞよろしくお願ひしますね。」

そう言つてにこりと笑う弥栄子に永久子は違和感を感じた。妙に落ち着いている。もしかしたら永久子が思つているよりもっと年が上なのかもしれない。

「失礼ですが、お年を聞いても？」

「私、今年で三十になります。」

「まあ、一つ違いでいらしたのね。しかも年上の方だつたなんて失礼致しました。」

やはりこれだけ落ち着いた話しが出来るのは年上だつたからなのだ。しかし驚いた。女学生とはいかないまでも二十歳そこそこの女性と思っていたのに。まさか自分よりも年上だつたとは。

「気になさらないで下さいね。良く言われます。私も永久子さんの様な素敵な大人の女性に見られる様努力はしているのですけどこの通り生まれつきの童顔で自分でも恥ずかしいくらいで。主人にもからかわれますし。」

「弥栄子さんの旦那さんは海軍の将校なんですよ。あの人の前に出ると学会で発表するよりも緊張してしまつんです。」

「ふふ、やだわハ夜さんたら。私の夫はそんな恐い方ではなくてよ。」

「

笑う姿も何と上品で落ち着いているのだろう。これだけ可愛らしく大人な振る舞いの出来る女性が周りにいながらハ夜はどうして静枝なんかと結婚したのか永久子は改めて不思議に思った。

「それに私の主人とハ夜さんが会つたのなんて数える位じゃなくて？いつも冗談ばかりおつしやるんだから。」

「だつて君の旦那さんはいつも仕事で海外ばかり行つてゐるからさ。会いたくても会えないんだよ。酷い旦那さんだ、こんな美女を残して仕事に没頭なんて。」

永久子は顔には出なかつたが小さくむくれた。

堅物の学者で自分の妻にも興味がなさそうな振りをしてちゃんと相手になる女性が他所にいるではないか。どこまで深い仲なのかは知らないがハ夜の交友関係も広いものだ。

「でも良かつたわ、永久子さんがいてくださつて。いつも女性は私ぐらいで心細い思いをしてましたの。」

「私も今日が初めてです。ハ夜さんに誘われて来たのですけれど何だか緊張してしまつて。私も女性の方がいらっしゃつてくれて安心しましたわ。」

「私は単純にこの分野に興味があつて来てますのよ。そこで偶然ハ夜さんが声を掛けて下さつて。」

「こんなむさ苦しい所に美女がいたものだからつにつけ。」

「やめて下さいなハ夜さんたら。また奥様に嫉妬されでは敵いませんわ。」

「弥栄子はハ夜が既婚である事を知つているらしい。」

「ねえ、永久子さん。永久子さんてお呼びしても構わないかしら？」

「もちろんですわ。私の方が年が下なんですもの。」

「幾つも離れていないんですもの、私の事も名前で呼んで頂いて結構よ。どうぞ仲良くして下さいね。」

そう言ってにこっと微笑む弥栄子はとても艶っぽく美しかった。

## 第一十四章 「弥栄子」（後書き）

また気付いたら間が空いてしまいました‥‥  
そしてまた登場人物が増えたって言う‥‥いつになつたら終わる  
んだろう?  
ぶっちゃけまだ半分も行つてないつていう^ ^ ;

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4487e/>

---

女に生きた女

2010年10月10日18時02分発行